活に不安のない様に米を配給すると云ふことを考へて見ると良い。生産者の手を離れての消費者の口に入る迄各種の過程は總て計畫的に行はねばならぬのであります。先づ生産せられた米から保有米を計算し其れを差引いて供出米として供出する。此の供出された米を保管するには倉庫の見透しをつけねばならぬ。又之を輸送するには鐵道車輛の配車計畫、船舶の配船計畫、トラックの配車計畫、更に之等に伴つて派生する石炭、ガソリン、木炭の燃料計畫も必要とせねばならぬ。又之等輸送に從事する要員充足の計畫も必要である。斯くて米が輸送することが出來ても之を保管する倉庫の計畫が亦此處でも必要となります。配給所に運送する車輛計畫や消費者に應じて定められる配給所の位置や數の問題、最後に配給所から消費者に配給する計畫等々、各種の計畫が同時に樹てられねばならぬのであつて、其の中の一つに齟齬を來せば全體が圓滑に動かなくなります。大東亞共榮圏を建設する爲には吾々日本人は、今吾々が現に經驗して居る通り人が足らない。又運輸上の車輛船舶類も軍需品の輸送其の他の爲に平時の様に自由に使へない。又燃料も然りであつて、是等の少い人と物との中にあつて、圓滑に、支障なく食糧の配給をやつて行くには、どの計畫も眞劍に樹てねばならぬのであります。これには如何なる種類の統計數字も正確でなければならぬのであります。此の統計は重要だから正確を要するとか、あの統計は重要でないからいい加減で良いとか云ふことは、今日では許されないと思ひます。計畫が綜合的であればある程、如何様な統計でもどう云ふ方面で使はれるか判らないのであります。從つて如何なる統計調査でも、統計報告でも皆、眞面目で正確でなくてはならぬのであります。此の點はやゝもせば看過され易い點であるから特にこゝに指摘して置きたい次第であります。

第六は統計調査、統計報告が次第に詳細になつて來たことであります。

事變以來統計調査や統計報告が多くなつて參りましたのと同時に、其の調査內容や、報告內容が細かくなつて來た傾向があります。御承知の通り國勢調査の例にしても、昭和十五年の調査では從來に其の例を見ない複雜さを持つて居り、又現に行は

れる家計調査にしましても從前の調査と違ひ內容が詳細を極めて居ります。又農林統計に於きましても同樣であります。此の點は調査を受け又報告をせねばならぬ所謂被調査者側の各人、會社、工場、農家等の方々は勿論、其の他之等調査報告事務を實際に取扱はれて居る市町村、府縣の統計關係者には大變面倒な煩雜な手數を煩はして居るのであつて、其の勞苦に對しては深甚の感謝の意を表する次第であります。何故、被調査者や、市町村の方に斯樣な調査を御願ひせねばならぬか、これは水野調査官からお話のあつた樣に、今の政策が細に入り、微に入り、非常に細かい點迄具體的になつたからであります。前に一例を申上げました樣に、米は其の生產から最後の消費者の手に入る迄一々具體的に計畫が必要となつてくるのであります。殊に各家庭に米を配給するには其の世帶人員は勿論、其の職業、年齡迄も考慮して行はれて居る實狀であります。つまり行政のやり方が机上の抽象的な演繹的なやり方から、一般の實狀を良く調べて、其の事實に基いて行政を行ふと云ふ歸納的な方向に進んで來た爲であると思ひます。國民の實際の實狀を隅から隅まで良く見て、又實際の產業の實狀をよく把握して、これに基いて行政をやつて行く樣になつたからであります。大政翼贊會で「上意下達」と共に「下情上通」と云ふ事がやかましく申されてゐるが、これは國民の實際の聲を聞き政治をやる事であつて、極めて尤もな事であります。然し國民生活の實相、產業の實相と云ふものを尤も良く把握する方法は、とりもなほさず統計數字に依る事であると思ひます。これが爲統計調査や統計報告が多くなると共に非常に細かくなつて來たのであります。然し此處に問題があります。それは此の調査や報告に無駄な重複がある事であります。同じ樣な事を、あちらからも、こちらからも、市町村其の他に報告を命ずる樣な事であります。この點は後に更めて述べるが非常に遺憾な點であつて、將來これは統制し、改善せねばならぬ點であると思ひます

第七は集計の迅速が絕對に必要であり、それと共に迅速に調査結果を利用する樣になつたことであります。

統計調査や、統計報告の內容が詳細になり、其の數が多くなると共に、一方調査や報告の結果を直ちに利用する樣な狀態に

なつた爲、勢ひ、集計も迅速でなければならなくなつたのであります。戰前に於ても統計は必要であり、政策の基礎として重要でありましたが、どちらかと言へば、有つた方が便利であると云ふ樣な向がないでもなかつた狀態であつたのであります。然るに、今日に於ては前に述べました樣に、調査や報告の結果が右から左へと使はれる時代であります。而かも國の內外の情勢は刻々變化する所謂テンポの早い時代でありますから、數字が眞に生きて使はれる爲には、調査結果を早急に集計して取纒める必要があります。國勢調査の結果の集計は大正九年の國勢調査では全部集計が出來上る迄に約七年もかゝつた狀態でありましたが、今度の昭和十五年國勢調査の集計はその樣にのんびりして居ては間に合はぬのであります。戰時下重要國策の基本資料となる國勢調査たる以上は早急に集計する必要があります。現に其の最も重要な統計表は既に集計が出來上り利用せられて居るのでありまして、此の點は集計の長足の進步で、慶賀に堪へないところであります。斯樣に集計を早くすることに付ては當局では並々ならぬ努力が拂はれて居るのであります。卽ち集計するには人手が要る。此の人手を揃へることは、人手の少い今日仲々面倒でありますが、現在相當の人員を集めて集計をやつて居ります。又集計方法は機械集計と申しまして、集計する機械を用ひてやつて居ります。その機械の中でも穿孔器と云ふ機械は、從來大部分が輸入品であつたのでありますが、支那事變以來、其の機械の輸入が出來なくなりました爲我國で自給せねばならぬことゝなり、目下其の機械をどし〳〵製造しつゝ、一方に於て使つて居る狀態であります。又集計機と云ひ分類集計する機械も從來は我國では出來なく總てアメリカ製の機械を輸入して居たのであります。然し大東亞戰爭後はこれを輸入することが出來ませんから穿孔器と同樣、我國に於て自給せねばならぬのであります。斯樣な事情の下に在つて一層集計を迅速にする爲には、相當の努力を必要と致します。然し統計利用の迅速が切實に要請せられて居る今日では、萬難を排しても、一日も早く出來る樣にせねばならぬものと確信致します。

集計機構の完備して居るのはソ聯だと聞いて居ります。ソ聯では全國の生產統計を二日間で集計を完了すると云はれ、之に

は全國に三ケ所の統計計算局が設置せられ、高度の機械集計の設備があるとのことであります。我國でもこれに近い集計能力を一日も早く完備せしめることは今日の情勢に於ては絶對に必要なことであり、又調査報告の第一線に於て活動せられて居る各位の勞苦に對し酬ゆる所以でもあります。

集計の迅速化を計る方法としては、又別な行き方があります。それは前に述べた樣な申告書を中央に集めて、そこで集計する所謂中央集査の方法に對し、地方で卽ち市・町・村又は府縣で集計して、之を中央に報告して戴く所謂地方分査の方法であります。然し此の地方分査をやることはそれだけ市・町・村・府縣に手數を掛けることになります。時局下市・町・村・府縣共に事務多端な折柄、更に集計の仕事まで御願ひすることは現狀のまゝでは無理なことゝ思ひます。地方分査として御願ひするからには、それが出來る樣に統計調査の制度や組織を完備する必要があると思ひます。丁度今日戰爭を行ふには昔通りの弓、矢、刀を以つては戰へません。戰に勝つ爲には勝つ樣に飛行機、戰車、軍艦などを作る必要あるのと同樣であります。それは國が責任を以て考へて行かねばならぬと存じます。要するに集計の迅速化は集計方法が中央集査でやるにせよ、地方分査でやるにせよ、刻々に情勢の變化して行く今日、統計を生かして使ふ上に於て最も肝要な點であります。

第八は防諜上統計の取扱を嚴重にせねばなりぬ點であります。

今日統計に關する重要な問題の一として統計と防諜の問題を擧げねばならぬのであります。此の重要な問題に對して中にはまだ眞劍に考へて居ない向がないではないと考へられるのでありまして、今少し一般の注意を喚起したいと存じます。防諜の精神的構へは先刻水野調査官から御話がありましたから、こゝでは具體的に申上げたいと思ひます。申す迄もなく防諜の問題は米、英、蔣の武力戰で慘めな敗北を喫した敵は、今後、其の得意とする秘密戰の魔手を我々の銃後を護る國民の上に伸ばし、第一次歐洲戰爭で獨乙を敗かしたと同樣の筆法で、我國狀を探知し、國內を攪亂して最後の勝利を得ようとかゝつて來ること

は必然であります。これを思ふと緒戰の戰果に醉ふことなく「勝つて兜の緒を締めて」いよ〳〵防諜陣を强化せねばならぬものと存じます。此の防諜陣の强化は「諜報の防止卽ち機密を洩らさない」と云ふことだけでなく、「敵の宣傳謀略に乘らないこと」而して銃後の結束にひゞを入らせないことが肝要であります。これ等の點は統計と非常に關係を持つて居りますから統計關係者は深く此の點に思ひを致す必要があると存じます。

先づ敵の諜報活動と統計との關係でありますが、近年特に目立つて來たことは、戰爭の實體が武力戰から總力戰となつてからスパイの活動範圍も作戰計畫や、軍事施設に限らず、總力戰中最も大きな部門である經濟戰の方にも目をつけ、兵力の外に經濟力、工業生產力等を探ることになり、それにはこれ等の統計數字を探る爲に暗躍する樣になりました。つまりスパイの對象は數字になつたと申してよいのであります。以前のスパイと云へば映畫で御馴染みの間諜X二七號の樣に美人が美貌を餌に敵の樞機の中に入り込むと云つた、ロマンチックなことが考へられたのでありますが、今日では、科學的に兵力、經濟力等を統計數字によつて突きとめようとして居るのであります。戰爭が長期戰化すれば敵は我の戰爭持久力卽ち生產力、經濟力等の調査觀測を執拗にやる。殊に我國に對する場合では、我國民の愛國心が極めて强い爲、我國に對しては思想謀略は困難と觀た爲か、我國の最大の弱點は經濟部門にあると觀た爲か、その方面の諜報卽ちスパイ活動、宣傳、謀略をやらうとして居ります から軍備に直接關係ある方面は勿論、此の方面の統計を特に嚴重に注意せねばならぬと存じます。

然らば統計數字の防諜とはどうせばよいか。これは極めて平凡なことでありまして、結局、濫りに數字を印刷物として公表せないこと、統計表は勿論その材料となる個々の資料の保管を嚴重に注意すること等に過ぎないと思ひます。よく世間では自分は物識りだと云はんばかりに日本銀行の兌換券の發行高は現在六十億圓もある。だから物が高くなつたのだと云ふ風に統計數字を振り廻して不用意な結論を下して得意がつて居る人があります。これなどは公表されて居る

數字であるからよいが、これは一寸秘密だが、今、我國の製鐵高は一ヶ年に何百萬トンだとか話す人があります。これがいけないのであります。英國大使館が主として指導しやつて居たものに「ゴア・ブースの耳內話會」と云ふものがありますが、此の心理を利用したものであります。此のゴア・ブース耳內話會と云ふのは諜報組織であると同時に、宣傳諜略もやる組織であつて、諜報卽ち秘密を取る爲にはギヴ・アンド・テークでなければならぬと申し、何でもないこと、又謀略的なことをこれは秘密だがと云つて相手に敎へる、相手は秘密なことを敎へてもらつたのだから得意になつてこちらからも秘密を敎へることになる、と云ふ人の心理を利用した英國人らしい巧妙な老獪な手段で秘密を探る組織であります。此の會員は英國の駐在武官、駐在外交官が中心となり、實業家共の他顏の利く親英的の上層階級の人々を選んで居たのであります。兎に角、相手に秘密を話し、秘密を聞くところに禍の基があるのであります。同じスパイ組織にも斯樣に上層階級の人から種を取らうとするやり方卽ち歐米系統のやり方に對し、支那、滿洲、ソ聯で主としては行はれて居る樣な大衆組織を狙つて事務員や驛員を使つたりして是等の中に喰ひ込んで種を取らうとするやり方卽ち大陸系統のやり方があります。この方法は斷片的な材料を絕えず注意して蒐集して、之を綜合して結論を求めようとするのでありまして、斷片的な統計又は統計の素材を蒐集して、それを繼ぎ合して目的とする全體の數字を作り出すのでありまして、各工場の從業者數を集めて、之を整理して、全體としての生產能力の判定に利用しようとするのであります。丁度部分的な地圖を寄せ集めて全縣又は全國の地圖を作り上げる樣な類であります。之の場合、其の一つ〳〵として見た場合は左程秘密でないと考へられるものでも、それを寄せ集め全體に纏めると其の相貌が現はれる結果となるから、一見つまらぬことでも秘密にして置く必要があります。

よく從來あつたことでありますが會社、工場等で見學視察者の爲又は自己の工場の宣傳の爲、會社一覽とか工場一覽とかを作つて、數字で說明したものがありましたが、これなどは其の工場の性質、能力が判るのみならず、あちらの工場のもの、こ

ちらの工場のものを集めて行くと、結局、工場調査をしたと同様の結果を求めることが出來るから危いものであります。

防諜上統計を秘匿せねばならぬが總ての數字を秘密する必要はないと思ひます。あまり何でも秘密主義にすると世の中が暗闇になり却つて不安となります。そうかと云つてあまり開放的にしたのでは今申し上げた樣な事になります。其の程度と云ふものは實際上むづかしい問題であります。ただこゝで申して置きたいことは、此の數字は秘密でないと思つたことが案外問題の種となると云ふことであります。スパイをやる樣な奴は相當頭が動くものと考へねばなりません。戰爭が起ると何處の國でも出生の數が減る。これは當然のことだと云つて無雜作に出生統計を發表する。成程出生統計自體は秘匿する必要はないかも知れません。が頭のある奴はこれから出征軍人の數卽ち兵力の推算をやる。又馬も戰時には人間と同樣に徵發せられることは當然であり、其の數は勿論秘匿せねばならぬ。然し一方荷馬車の數や農馬一頭當りの耕作面積などの樣なものを發表したのでは何もならぬことになります。又戰車や飛行機の數は勿論機密中の機密のものであらうが、これを秘密にして置いて、石油やガソリンの生產高や輸出入高を公開して置いたのでは何もなりません。直ちに石油やガソリンの消費量を計算して之から戰車や、飛行機の數を推算する。これ等の例は頭を隱して尻尾を隱さぬ類であつて、統計の知識、統計數字の扱ひ方を知らぬから、その樣なことになるのであります。勿論軍機保護法や、軍用資源秘密保護法等で是等の推定材料となるものゝ取締が嚴重になつて居りますが、之等の法律で規定されて居なくとも、尙國家の爲、秘密にせねばならぬものも多々あるから取扱ひに注意せねばなりません。

次に防諜上注意せねばならぬことは、調査したことを發表したがることであります。折角、調査して得た統計であるから、之を死藏してはならぬ、統計は利用して初めて存在の意義があるのだから、之を公表せぬと調査の意味がないと考へる向があります。一應尤なことでしやうが、然しこの考はあまりにも單純な考へ方であると思ひます。勿論、調査した結果を利用する

ことは調査の目的である以上、當然大いに活用せねばならぬ。然し公表することと、利用することとは別問題であります。公表しなくとも統計は利用出來ます。つまり統計を作つても之を原表のままで利用せばよいのであります。これを原表主義と申しまして戰時下の統計は此の原表主義を原則とし、實際計畫上必要な向には其の數字を知らしてやり、利用に遺憾なからしむることとするのが最もよいと思ひます。それを考へ違ひしてか、又調査の掌に當つた者が自分のやつた仕事を認めて貰らうと云ふ功利的な考へから、何でも公表する者がありますが、これは國家的に見て極めて危險なことと云はねばなりません。

次に調査結果たる統計を印刷物とし、又謄寫版刷等として相手先を充分吟味しないで無闇に人に遣りたがる向があります。勿論、秘密を要するものには「秘」とか「極秘」とかの印を捺して遣るのではあるが、然し、これも極めて危險があると思ひます。貰ふ方の側の人では、あちらからも、こちらからも貰ふ、御好意は至極結構ではあるが、遂々目を通す機會がない。それを其のままおいて置く。其の中に忘れてしまふ。又數多くなると邪魔になる。仕方がなくそれを整理して古本屋に賣る。屑屋に賣る。此れ等のことはよく日常經驗することであつて、これが過ちの基となるのであります。時々古本屋に「秘」の字のある本がある。此の樣な經過を經て居るのではないかと想像致します。統計書を寄贈する側では、そこ迄考へて居ないであらうが、そう云ふ結果になるのでありますから、そこ迄考へて、相手をよく吟味して濫發せぬ樣にした方がよろしい。又利用の途を示して來る者に限り遣る樣にするとかよく考へた方がよいと思ひます。

尙これに關聯して附言して置きたいと存じますことは、自分の研究の爲には防諜と云ふことに頓著なく無闇に統計數字を使ふ人があります。そう云ふ人は統計は利用する爲に出來て居るのだから利用しないのなら統計を作る必要はないと申します。而して研究結果を誇らしげに公表致します。これなどは研究に沒頭する人によくあることでありまして、研究する態度自體は眞純であり、其の研究內容も立派であり敬意を表さなければならぬでありませうが、其の結果を國家的に見るならば遺憾と云

はねばならぬのであります。研究結果を公表しないで、所要の場所に於て研究結果を役立たしめる様に措置することが今日の行き方ではないかと考へます。

次に防諜上見逃してはならぬのは綜合統計書のことであります。よく何年鑑とか、何統計書、要覽等とか云ひ、一冊の書物を見れば何の統計も出て居て、頗る便利で重寶なものが多多あります。これ等のものは、それが一冊あれば其の國、其の府縣、其の市町村の實狀がよく判りますから防諜上其の刊行を慶めるとか、編纂内容を充分吟味する必要があります。一體其の國の國力、戰爭能力を判定するには其の國の人口、産業、經濟、衛生、教育、軍事等各方面の事情を綜合して判斷される譯でありますが、とりわけ、是等の統計數字を蒐集して、之を綜合して判斷することが最も有力なる方法であると思ひます。各地方の經濟力、産業力、政治力等の判斷についても同樣であります。而して、斯樣な場合、何んな統計數字でも網羅蒐集せられて居る統計書や、要覽があれば、棚から「ぼたもち」で、これ程好都合のことはない。スパイが四苦八苦して統計を集めやうとする場合、斯樣な綜合的統計書があれば、全く天の佑けに會つたのと同樣であります。これに反し統計書を作つた者の方面から見ればスパイの仕事を援助してやつた結果になります。結局、此の場合統計が綜合せられてあるところに問題があり、警戒せねばならぬ點があるのであります。斯樣な譯で綜合統計書を作り自慢げに公開することは危險千萬であります。然し統計には秘密でないものもあります。秘密を要するもののみを除外して、差障りのない數字だけを綜合して綜合統計書とし、又要覽として出しても差支へがないではないかと云ふ議論もあります。尤もなことであります。然しよく考へて見ると左樣に簡單に云へないこともあります。例へば繪を畫くとき紫色が必要だと云ふ時に紫色がない。然し、赤と青とがあればそれが出來ると同樣に、直接關係のない別な統計を集めてそれを計算研究して行くと、求める結果を推定し得ることがあります。故に不用意に此の程度の數字だけならばよいと考へて、綜合統計書も作れないと云ふことになります。

綜合統計書が危險であることは、ソ聯のコムアカデミー所屬員であると思はれるターニン、ヨーガンの兩者の共同研究である「日蘇若し戰はば」と云ふ書物があります。之は日本の戰時持久力を研究した書物でありまして、此の書物を見るとよく判ります。此の二人は日本の軍需工場個々につき研究せる外、日本全體の戰爭持久力を兵力動員量、軍需資源、軍需工業生產力、燃料及動力資源、食糧、農業生產力、國民所得、產業資金卽ち金融等各方面に亙つて詳細に研究して居ります。而して日本の長所、弱點を指摘して居ります。此の研究の爲、各分野に亙る種々の統計を驚く程よく集めて、綿密に研究して居ります。其の中で目立つのは、統計年鑑、農業年鑑、勞働年鑑の樣な綜合統計書が利用せられてゐることであります。こう云ふものがあれば各種の統計が掲げられてあるから研究上至極便利であります。今日、各官廳方面で次第に年鑑、要覽等各種の統計を集めた印刷物を出すことを差控へたり、一般に頒布することを差控へられて居るのは斯樣な譯であります。

次に統計が世の中に出なくなつた爲、仕事が出來なくなつたと云ふことをよく聞くが、これは尤なことであり又一面統計が如何に重要であるかを物語るものであります。然し、前にも述べた樣に統計は公表しなくもよい。數字を持つて居る者が、必要な向にだけ知らしてやり、利用上遺憾なき樣にせばよいのであつて、それを印制物とし、新聞、雜誌等により一般に發表する必要は少しもないと思ひます。

最後に數字の防諜と之に關聯する取締との關係であります。只今のところ統計だけを特別に取締る規則はありませんが、軍機保護法、軍用資源秘密保護法等に依つて、取締まられて居ります。例へば將校の總數、其の役種別數、其の階級別數、聯隊區又は兵事區以上の區域に於ける在鄕軍人數、或は特定の標示をなした軍需品工場の從業人員等の如きは何れも軍機保護法で取締られて居ります。又各種兵器の生產額、アルミニウム、マグネシウム、ニツケル、航空揮發油、貨物自動車等の製造工場に於ける生產額、全國及道府縣別、五大都市別卽ち、東京、横濱、名古屋、大阪、神戸に於ける蒸氣機關車乘務員卽ち、機關士、機

關助士の數、航空機乘員の數、無線通信有技者の數、航空機の數、貨物自動車、乘合自動車の數等の如きものは、何れも、軍用資源秘密保護法で取締まられて居ります。尙一々申上げることは省略致しますが、其の他色々のものが取締られて居ります。尙國家總動員機密保護としての定めもありまするが然し、此の法律や定めに於きましても、今日、秘匿を必要とする事項が網羅されて居る譯ではありません。從つてこれは法規で取締まられて居るから秘密にする、又これは法規で取締られてゐないから數字を勝手に公表してもよいと簡單に考へるのは大間違ひであると思ひます。成る程、法規で取締られて居らないのは處罰せられないが、處罰せられないから發表しても宜しいと云ふ理窟は立たぬと思ひます。それは、法規で取締られて居ることだけを守れば防諜が完全だと云へないからであります。吾々は此の點を明確に認識して置く必要があると思ひます。一體、法規で取締られて居ることは最後の線が押へられて居るだけでありまして、この最後の線だけを押へたのでは防諜の完全を期することは絶對に不可能であります。前に申しました樣に、貨物自動車、乘合自動車の數は全國の總數、府縣別の數、東京、横濱、名古屋、大阪、神戸の五大都市に在る數だけが、法規で取締られて居るから一般に公表出來ない。然し其の他の市又は町村に於ける數は此の法律で取締られて居ないから出してもよいではないかと云ふことになりますが、だが防諜と云ふ見地から見ますと、これは過つた考へ方であると思ひます。各市町村から遠慮なく此の數字を出すと、とんでもないことになります。スパイが各市町村に於ける此統計を集めて、集計せば頭を隠して尻尾を隠さなかつた結果となります。同樣に徴兵區又は兵事區以上の區域に纒つた在鄕軍人の數は、軍機保護法で取締らにて居るから出せないが、市町村別の數字は其の取締りがないから自由に出してもよいかと云ふに、防諜上から見ればそうは行きません。前と同じ樣な結果となるからであります。

要するに是等の取扱に付ては、吾々、御互の一人一人が防諜戰士となり、防諜の何であるかを充分理解し、統計の知識を養ひ、統計から誘導される結果を先づ考慮し、如何に處置すべきかを決定して行くべきであると思ひます。

第九に統計一元化の問題であります。

最後に述べたい點は此の統計一元化の問題であります。この點は現在統計の實狀から見て最も大きい問題であります。又防諜上統計の統制と云ふ所から見ても大切なことであります。以下此の問題について述べたいのでありますが、時間もありませんし、又私から申し上げることの出來ない點もありますから、こゝでは極めて常識的なことばかり申上げて失禮させて戴きたいのであります。さて前にも述べました様に、今日、同じ一つの事項に付て統計の種類が多過ぎるのであります。人口に付て見ましても、これは國勢調査の人口だ、これは米の配給の人口だ、これは砂糖の配給人口だと云ふ様に同じ年で而かも同じ時期の調べの人口でも立場立場で人口數が違ひます。それは人口の調べ方が違ふからであります。同じ產米統計でも統計を作る立場が異る毎に數字が異つて來ます。一縣に何本もの人口があり、何本もの米の生產高があるのでは、これは記憶して運用する者は大變な苦痛であるのみならず、それでは眞の正しい公平な政治が行はれません。これは今更申す迄もないことであります。又防諜上の問題から見ても、統計の發表を統制せずに放任して置くことはスパイに乘ぜられる基であります。斯様な意味から統計を統制し、一元化することは今日、どうしても、やらねばならぬことであります。又市町村、工場、會社、各種團體等統計を報告する立場から見ても統計の統制一元化の問題は極めて切實な問題であると思ひます。事變以來市町村の事務は極めて多端となつて來ました。其の事務の中統計調査や數字の報告ものが目立つて多くなつて居ります。私が實地に調べたところによると、東京府の某村に於ては役場の仕事の約半分が數字の報告事務であつたのに驚いたことがあります。又先日の某新聞によると企畫院で調べたところに依れば、或工場から報告書を出すこと年四百件、二千通に及ぶと云ふことでありました。其の報告書の全部が統計に關するものでないにしても、統計に關するものも相當あることは間違ひないと思ひます。統計報告の多いことは前にも述べた様に國の行政が具體的になつたから止むを得ないでありませうが、中には報告に重複があつたり、類似のものがあつて、無駄なものもあります。ここに統計の統制統一の問題があるのであります。即ち公正な行政の爲にも、事務を簡素化して能率を高める上にも、亦防諜の立場からも統計の統制統一の必要が、今、切實に感ぜられるのであります。

資料

昭和十八年三月全國及各都市生計費指數

（昭和十二年七月基準）（統計局調）

一、全國生計費指數

	總指數	飲食料費	住居費	光熱費	被服費	其の他の諸費
勞働者	一六〇・三	一六四・二	一三〇・四	一五二・八	二二四・五	一五三・七
給料生活者	一五六・七	一六六・四	一二四・八	一四七・二	二二三・九	一二八・一

二、東京市生計費指數

勞働者	一五八・八	一六七・〇	一二二・一	四〇・七	二二八・六	一五四・一
給料生活者	一五四・一	一六九・三	一一八・二	一五六・三	二二七・〇	一二八・二

三、大阪市生計費指數

勞働者	一五九・三	一六二・七	一二六・七	一三五・二	二二四・五	一五六・五
給料生活者	一五七・二	一六五・七	一二四・七	一二九・九	二二四・一	一五三・四

四、各都市生計費指數

| | 勞働者 | | | | | |

彙報

●昭和十八年度通常總會

昭和十八年四月二十二日午後四時四十分より麻布區富士見町一番地統計局に於て昭和十八年度本會通常總會を開催、左の議案を附議した。

一、昭和十七年度事務報告ノ件
一、昭和十七年度歳入及歳出決算報告並資産調ノ件
一、昭和十八年度歳入及歳出豫算案ノ件
一、職員改選の件

出席者は（順序不同）

窪田静太郎　川島孝彦　下條康麿
藤本幸太郎　亀田豊治朗　二瓶士子治
渡部喜一　土居甫　松田博
高基　芦見次雄　鳴坂よし子
野口彦一　山村昌　渡邊正典
宮澤はつ　伊藤平重郎　大島倉一
加地成雄　公木平初太郎　浦上英男
森數樹　加藤益次郎　林壽
篠原眞平　成瀬いし　佐多ミツ
伊東久吉　荒井水穂　坂鎌子
矢野元三　工藤キヨ　大澤ハナ
辻村桃夭子　井桁サト　蜂須賀幾次郎

の三十六名であつて窪田會長議長席に著き開會を宣し先づ宮城遙拜、護國の英靈に感謝並に皇軍將士の武運長久を祈念するための默禱を捧げたる後日程に入る。最初に蜂須賀事務委員昭和十七年度の事務報告をなし又昭和十七年度歳入及歳出決算報告並資産調の内容に就て説明をなし下條監事より歳入及歳出決算並資産調に就き監査の結果相違なき旨の報告あり異議なく承認を得た。次に蜂須賀事務委員は昭和十八年度歳入及歳出豫算編成の趣旨を説明し之亦異議なく議決した。次に職員改選の件に入り二瓶士子治君は「選擧を省略し監事、評議員ともに議長の指名に委し度但し評議員中には窪田静太郎君を加へられたし」と提議し一同之に賛成した。仍て議長は左の如く昭和十八年度職員を指名した。

監事　矢野恒太君
同　下條康麿君
評議員　石坂泰三君
同　蜂須賀幾次郎君
同　林惠海君
同　長谷川赳夫君
同　蜷川虎三君
同　友安亮一君
同　鷲尾弘準君
同　河原富造君

評議員　川島孝彦君
同　理學博士　龜田豐治朗君
同　上條　勇君
同　高田太一君
同　法學博士　高野岩三郎君
同　武内信男君
同　子爵　曾我祐邦君
同　塚本清治君
同　根岸錬次郎君
同　經濟學博士　中川友長君
同　長畑健二君
同　那須時夫君
同　牛塚虎太郎君
同　上野幸七君
同　法學博士　窪田靜太郎君
同　法學博士　山崎覺次郎君
同　松井春生君
同　商學博士　藤本幸太郎君
同　關永與一郎君
同　經濟學博士　小林　新君
同　近藤康男君
同　農學博士　寺尾琢磨君
同　阿部壽準君

評議員　清原德次郎君
同　平木　弘君
同　男爵　平山洋三郎君
同　森　數　樹君
同　森田優三君
同　關三吉郎君

次に窪田議長は總會を暫時休憩し直に評議員會を開會する旨を宣し理事互選の評議員會に入る。同評議員會に於て森數樹君より「理事の選擧を省略し會長としての理事に川島孝彦君就任せられたし尚此の以外の理事一名は缺員として置きたし」と提議し一同之に贊成した。仍て窪田議長は休憩中の總會を再び繼續する旨を宣して評議員會に於て決定したる理事を報告し次いで窪田議長及川島孝彦君は交々起つて會長並副會長就任の挨拶を述へられた。最後に窪田議長は昭和十八年度の各委員を前例に依り指名依囑し、玆に總會は議案全部を滯りなく議了した。夫より加地成雄氏の表彰式を擧行し午後五時三十分閉會した。

昭和十八年度委員

事務委員　那須時夫君
同　蜂須賀幾次郎君
編纂委員　友安亮一君
同　加地成雄君
同　蜂須賀幾次郎君

報告委員

伊藤清君
池田功君
池田實一君
林壽君
二瓶士子治君
堀田武夫君
藤稿善太郎君
小田部文雄君
渡邊喜一君
河崎誠兵衛君
金子皓君
加藤益次郎君
高津英雄君
高梨戌君
高田桑三君
竹内喜好君
中西新太郎君
中村芳貞君
中山照夫君
浦上英男君
乃万徹君
野澤勝二君
野口彦一君
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同

報告委員

久保守明君
山村昌君
山田正治君
山田平司君
矢野元三君
松田博君
松浦素君
公木平初太郎君
高基君
新井關洲君
齋藤靖君
宮本武平君
榮田種二君
篠原眞平君
大四郎君
平井幸雄君
望月敬之君
關森健次君
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同

會務委員

群馬縣　富岡恒治郎君
和歌山縣　竹内惟廉君
香川縣　安藤一雄君

論說研究	八
譯	一一
資料	一六
彙報	四七
地方通信	二七
其の他	七
合計	一一六
一ヶ月平均	一〇

一、統計事業應援其他

1、內閣統計局開催の家計調査主任者打合會出席者及同會關係官等九十二名を七月十一日青山會館別館へ招待し午餐會を開催せり

2、故阪谷子爵記念事業會へ十月九日本會より金貳百圓を醵金せり

但し右の貳百圓中には昭和十七年二月故阪谷子爵追悼會の節評議員根岸錬次郎氏より拜受したる金壹百圓を含むものなり

3、柳澤記念事業として左の如く出張講演を爲せり

昭和十七年七月北海道へ

東京商科大學教授　杉本榮一氏

4、柳澤記念事業資金を以つて統計講習會を二回開催せり第一回は統計局奈良縣及奈良縣統計協會後援の下に昭和十七年十月十三日乃至十五日奈良市公會堂に於て開催し左記諸氏の講演ありたり

內閣統計局長　川島孝彥氏

昭和十七年度事務報告

一、出版圖書　七千五百五十部

統計集誌

內閣統計局編纂昭和十五、十六年家計調査報告　六百五十部

一、評議員會は昭和十七年四月二十一日開會す其の議案左の如し

一、昭和十六年度事務報告の件

一、昭和十六年度歲入及歲出決算報告竝資產調の件

一、昭和十七年度歲入及歲出豫算案の件

一、四月二十七日（月曜）午後四時より昭和十七年度通常總會開催の件

一、通常總會は昭和十七年四月二十七日開會す其の議案左の如し

一、昭和十六年度事務報告の件

一、昭和十六年度歲入及歲出決算報告竝資產調の件

一、昭和十七年度歲入及歲出豫算案の件

一、職員改選の件

一、寄贈圖書　一一六

寄贈圖書受入

寄贈雜誌受入　九七五

一、受信及發信通數

受信通數　一、〇三三

發信通數　二、三九五

一、統計集誌掲載事項（自昭和十七年三月至昭十八年二月）

企畫院調査官　水野　潔氏
京都帝國大學教授　蜷川虎三氏
國勢社主幹　白崎亨一氏
內閣統計局統計官　友安亮一氏
奈良縣師範學校教諭　堀井甚一郎氏

第二回は統計局、福岡縣及福岡縣統計協會後援の下に昭和十八年三月十七日乃至二十日福岡市西日本新聞社講堂に於て開催し左記諸氏の講演ありたり

統計局統計官　森數樹氏
西日本新聞社特派員　石內弘一氏
同　下本地榮氏
同　榮田安兵衛氏
商工省統計官　武內信男氏
九州帝國大學教授　三田村一郎氏
農林省統計官　長畑健二氏
國勢社主幹　白崎亨一氏
西部軍司令部報道部陸軍中佐　有薗善行氏

5、柳澤記念事業賞金を以て左の通り統計功勞者表彰を爲せり

元山口縣統計課長　西村一三氏
元群馬縣統計課長　小板橋壽男氏
元北海道廳統計課長　內館泰三氏

一、昭和十七年度中會員異動

一、昭和十六年度末現在　四百八十三名
一、入會　二十五名
一、退會及死亡　三十九名
一、昭和十七年度末現在　四百六十九名

內訳

名譽會員　一名
特別會員　十四名
終身會員　二十名
通常會員　四百三十四名

一、昭和十七年度中購讀者異動
一、昭和十七年度末現在　百三十七名
一、加入　十五名
一、脫退　五名
二、昭和十七年度末現在　百四十七名

昭和十七年度歲入及歲出決算

歲入決算總算

第一款　會費　一、四一二・四四〇円
第二款　出版物　一、二六〇・〇〇〇円
第一項　統計集誌　四、四八九・一六〇　一〇、五一六・〇〇〇
第二項　昭和十五・十六年家計調査報告　七三二・六八〇　七五六・〇〇〇
　　八一七・六八〇　六一〇・〇〇〇

第三項　列國々勢要覽昭和十六年版	二、七三一・四七〇	二、七五〇・〇〇〇
第四項　列國々勢要覽昭和十七年版	一・〇三〇	五、五〇〇・〇〇〇
第五項　其ノ他ノ圖書	二〇六・三一〇	九〇〇・〇〇〇
第三款　有價證券及預金利子	一、〇五三・九四〇	一、〇五〇・〇〇〇
第四款　雜收入	三八三、七〇〇	五〇〇・〇〇〇
第一項　運賃及荷造費	三七二・一一〇	四〇〇・〇〇〇
第二項　廣告料	一〇・〇〇〇	五〇・〇〇〇
第三項　其ノ他ノ雜入	一・五九〇	五〇・〇〇〇
寄附金	二〇・〇〇〇	—
總計	七、三五九・二四〇	一三、三二六・〇〇〇

歳出

第一款　印刷費	二、三四七・四一〇円	七、九八〇・〇〇〇円
第一項　統計集誌	一、六四七・一一〇	一、九二〇・〇〇〇
第二項　昭和十五・十六年家計調査報告	六九五・五〇〇	五六〇・〇〇〇
第三項　列國々勢要覽昭和十七年版	—	五、〇〇〇・〇〇〇
第四項　其ノ他ノ圖書	四・八〇〇	五〇〇・〇〇〇
第二款　給與	四三七・〇〇〇	五〇〇・〇〇〇
第三款・謝儀及原稿料	三五六・〇〇〇	五〇〇・〇〇〇
第四款　事務費	一、六二八・六〇〇	二、二三〇・〇〇〇
第一項　集會費	四八二・三六〇	六〇〇・〇〇〇
第二項　修繕費	一三・〇五〇	二〇・〇〇〇
第三項　備品及圖書費	七・七〇〇	五〇・〇〇〇
第四項　消耗品費	一七一・八三〇	三〇〇・〇〇〇
第五項　通信運搬費	五七〇・〇九〇	七〇〇・〇〇〇
第六項　廣告費	二・五〇〇	七〇・〇〇〇
第七項　電話費	八四・二七〇	九〇・〇〇〇
第八項　雜費	二九六・八〇〇	四〇〇・〇〇〇
第五款　營繕費	—	五〇〇・〇〇〇
第一銀行新株式百株拂込金	一、二五〇・〇〇〇	—
資産ヘ繰入	一、三四〇・二三〇	一、六一六・〇〇〇
總計	七、三五九・二四〇	一三、三二六・〇〇〇

別途會計　昭和十七年度
歳入及歳出決算

一、ハイド文庫寄附金

歳入

資金積立額繰越	二、四九九・三六〇円	二、四九九・三六〇円
資金利子	八二・八九〇	八〇〇・〇〇〇
合計	二、五八二・二五〇	二、五八四・三六〇

歳出

文庫整備費	一七・七〇〇	八〇〇・〇〇〇
資金積立	二、五六四・五五〇	一、七八四・四六〇
合計	二、五八二・二五〇	二、五八四・三六〇

二、花房統計奬勵資金

歳入	円
資金積立額繰越	五、四七六・〇三〇
資金利子	一八一・六二〇
合計	五、六五七・六五〇

歳出	円
統計奬勵諸費	一
資金積立	五、六五七・六五〇
合計	五、六五七・六五〇

三、柳澤記念事業資金

歳入	円
元金	一三、〇〇〇・〇〇〇
寄託事業資金繰越	二、一九三・六三〇
資金利子	一、一〇〇・二二〇
合計	一五、二九三・八五〇

歳出	円
事業費	二、一八七・二九〇
保留金	一
事業費繰越	一、一〇六・五六〇
元金	一三、〇〇〇・〇〇〇
合計	一五、二九三・八五〇

資産目錄

（昭和十七年度末現）

資産總額　五四、八七七・五五〇円

一般會計資産

總額（動産）　三一、九九五・〇六〇

内譯　四、三四五・二五〇

一、現金並預金　一六・八一〇

内譯　一九・四九〇

手許現金　三、九六七・八七〇

銀行預金（當座）　三三六・〇八〇

銀行預金（特別當座）　五・〇〇〇

振替貯金　二五、七七九・〇〇〇

振替貯金基金　七、六〇〇・〇〇〇

二、有價證券　三、五〇〇・〇〇〇

第一銀行株式貳百株（額面壹萬圓）昭和十八年三月三十一日り時價八十八圓を以て換算したる額　四、一八〇〇〇

第一銀行新株式百株（拂込額千二百五十圓）昭和十八年三月三十一日の時價三十五圓を以て換算したる額

ろ號四分利國庫債券（額面四千圓）昭和十八年三月三十一日時價百三圓四十五錢を以て換算したる額

甲號五分利公債（額面五百圓）昭和十八年三月三十一日の時價百八圓二十錢を以て換算したる額　五四一・〇〇〇円

三、備品　一、二六八・五二〇

四、出版圖書（別表參照）　六〇二・二九〇

右の內特別基金　七、二五〇・〇〇〇

別途會計資產

一、ハイド文庫寄附金會計資產

花房統計奬勵費金會計資產

一、現金並預金　二八・三六〇

現金

銀行預金（三井銀行丸の內支店特別當座　三、三六七・三七〇

一、有價證券

ろ號四分利國庫債券（額面五千二百圓）昭和十八年三月三十一日の時價百三圓四十五錢を以て換算したる額　五、三七九・四〇〇

一、ハイド文庫書棚　七組　八九六・〇〇〇

一、圖書　八四・二〇〇

柳澤記念事業資金會計資產

一、現金並預金　七八・一四〇

現金

銀行預金（第一銀行銀座支店特別當座）　一、一三二・〇二〇

銀行預金（第一銀行本鄉支店定期）　四、〇〇〇・〇〇〇

一、有價證券

ち號三分半利國庫債券（額面四千圓）買入價格九十八圓三十錢を以て換算したる額　三、九三二・〇〇〇

東京瓦斯株式會社二十株（額面一千圓）買入價額六十八圓を以て換算したる額　一、三六〇・〇〇〇

關東配電株式會社株式七十二株（額面三千六百圓）元東京電燈株式會社株式五拾株の買入價格五十二圓五十錢を以て換算したる額　二、六〇五・〇〇〇

（別表）出版圖書（資產）

書名	前年度ヨリ越部數	本年度入部數	本年度出部數 無代賣却	本年度出部數 計	本年度末殘部數	本年度末殘部數 金額
大日本帝國統計摘要　五十四回	六八	—	—	—	六八	一三九・二〇〇円
勞働統計要覽　昭和十四年版	一〇	—	—	一	九	六・三〇〇
列國々勢要覽　昭和十四年版	一	—	—	—	一	・〇九〇
同　十六年版	九、六九六	—	九、六九四	九、六九四	二	・三〇〇

家計調査報告	昭和十三、十四年	四七	六八・九六〇	四一
同	十四、十五年	三七	五・五〇〇	五
同	十五、十六年	—	七・二〇〇	四
臨時國勢調査に關する質疑解答 第一輯		六五〇	・六九〇	四四
第二輯		二	四・九七〇	五〇八
第六回勞働統計實地調査に關する質疑解答 第一輯		四四	六四六	四四
昭和十五年臨時勞働及技術統計實地調査に關する質疑解答（第一輯）		五〇八	六四六	六
商工省統計表 昭和十三年		六	六三	六
商工統計摘要 昭和十二年		—	—	—
會社統計表 昭和十三年		—	—	—
物價統計表	昭和十三年	二	二	二
	同 十四年	—	—	—
貿銀統計表	昭和十三年	九七	九六	一三六・七〇二
	同 十四年	八五	八五	九・六〇〇
織物產額年報 昭和十三年		五	三	八・一〇〇
計		四二	四四	四九・〇二〇
		九九	四四	一〇六・九二〇
		五〇	二	四七・五二〇
		六五	四	一〇・九八〇
		三五	二	二五・〇八〇
		—	二	六〇二・二九〇

右の外電話器壹基あり

昭和十八年三月三十一日

右之通相違無之候也

東京統計協會

理事　窪田靜太郎㊞

理事　川島孝彥㊞

監事　矢野恒太㊞

監事　下條康麿㊞

昭和十八年度歳入及歳出豫算案

歳入

第一款 會費		五〇〇・〇〇〇
第二款 出版物		五〇〇・〇〇〇
第一項 統計集誌		二、二五〇・〇〇〇
第二項 昭和十六、十七年家計調査報告		七〇〇・〇〇〇
第三項 列國々勢要覽昭和十八年版		三〇・〇〇〇
第四項 其ノ他ノ圖書		五〇・〇〇〇
第三款 有價證券及預金利子		三〇〇・〇〇〇
第四款 雜收入		六〇〇・〇〇〇
第一項 運賃及荷造費		七〇・〇〇〇
第二項 廣告料		一〇〇・〇〇〇
第三項 其ノ他ノ雜入		四〇〇・〇〇〇
資産より繰入		五〇〇 〇〇〇
總計		八、八九五・〇〇〇

歳出

第一款 印刷費		五、一四五・〇〇〇
第一項 統計集誌		一、八〇〇・〇〇〇
第二項 昭和十六、十七年家計調査報告		八四五・〇〇〇
第三項 列國々勢要覽昭和十八年版		二、〇〇〇・〇〇〇
第四項 其ノ他ノ圖書		五〇〇・〇〇〇
第二款 給與		二、五六四・五五〇
第三款 謝儀及原稿料		八三・〇〇〇
第四款 事務費		二、六四七・五五〇
第一項 集會費		
第二項 修繕費		
第三項 備品及圖書費		
第四項 消耗品費		
第五項 通信運搬費		
第六項 廣告費		
第七項 電話費		
第八項 雜費		
第五款 臨時費		
總計		

別途會計 昭和十八年度歳入及歳出豫算案

歳入

一、ハイド文庫寄附金	
資金積立額繰越	
資金利子	
合計	

歳出		
文庫整備費	九〇〇・〇〇〇円	
資金積立	一、七四七・五五〇	
合計	二、六四七・五五〇	
二、花房統計奬勵資金		
歳入		
資金積立額繰越	五、六五七・六五〇	
資金利子	一、八二・〇〇〇	
合計	五、八三九・六五〇	
歳出		
統計奬勵諸費	二、〇〇〇・〇〇〇	
資金積立	三、八三九・六五〇	
合計	五、八三九・六五〇	
三、柳澤記念事業資金		
歳入		
元金	一二、〇〇〇・〇〇〇	
寄託事業資金繰越	一、〇六・五六〇	
資金利子	六二〇・〇〇〇	
合計	一三、七二六・五六〇	
歳出		
事業費	一、五七六・五六〇	
保留金	一五〇・〇〇〇	
事業費繰越	一二、〇〇〇・〇〇〇	
元金	一三、七二六・五六〇	
合計		

●家計調査施行規則中改正閣令公布及改正要旨竝理由

四月九日閣令第九號を以て家計調査施行規則中の一部改正規定が次の通り公布された

○閣令第九號

家計調査施行規則中左ノ通改正ス

昭和十八年四月九日

内閣總理大臣　東條英機

第二條中「内閣」ヲ「内閣總理大臣」ニ改ム

第八條及第二十條中「内閣統計局長」ヲ「統計局長」ニ改ム

別表一　給料生活者世帶ノ部中

「宮古市一八三三」ヲ「宮古市一八三六二五」ニ、

「小坂町一〇一三五」ヲ「小坂町一〇一三二五」ニ、

（秋田町）　（秋田縣）

「太田町一五五」ヲ「太田町一五五三二五」ニ、

（群馬縣）　（群馬縣）

「銚子市三〇五五一〇」ヲ「銚子市三〇五六九一〇」ニ、

「川崎市三〇五五一〇一〇」ヲ「川崎市三〇五二一三一〇」ニ、

「焼津町一七五五二五」ヲ「焼津町一七五三四五」ニ、

（静岡縣）　（静岡縣）

「飯塚市一五五一一〇一」ヲ「飯塚市一五五二八一」ニ、

改ム

同表四　商家ノ部中
「宮古市一〇」ヲ「宮古市一〇
一一一

收入」を觀念的にも又其の範圍に於ても直截簡明なる「基本給」に改めたること。

二、農家の選定具備要件たる耕作面積は元來專業農家に付て考ふるを妥當とするものなるも、地方に於ては專業農家の耕作面積の上限を引上げ、本調査の對照となる農家の耕地面積を幾分にても專業農家の耕作面積の基準に近からしめ、且是に依り記帳能力ある農家を多數選定して調査所期の目的を擧けん爲募集當時管内農家一戸當耕作面積の十五割以下を二十割以下に改めたること。

三、調令改正の機會に官制の改正に伴ひ當然改正せらるべき「内閣統計局長」を「統計局長」に改めたること。

●第八十一回帝國議會に於ける東條内閣總理大臣の人口動態趨勢報告

東條内閣總理大臣は第八十一回帝國議會に於ける施政演説中に我國に於ける人口動態の趨勢を左の如く報告せられた

「曩古の大戰中にも拘らず、累年我が國の人口動態極めて良好でありまして、出産の如きは空前の數に達し、死亡は減少の歩を辿りつゝありますることを報告し得ます、ことは、誠に力强き限りであります。」（貴族院議事速記錄に依る）

●統計機構の整備强化に關する建議

第八十一回帝國議會に際し小柳牧衛氏外十三氏に依つて統計機構の整備强化に關する建議の推田決議せられたることは、國家總力發揮の一翼を負荷せる全國統計事務關係者の心身を更らに緊縛し、旁ら其の共感を提撕せしむるところがあつたが、今、その建議文及び建議委員會の速記を掲ぐれば左の通りである。

△建　議　文

政府ハ時局ノ重大性ニ鑑ミ統計機構ノ整備强化並統計事務ノ官公吏ニ對シ適切ナル優遇ノ方法ヲ講ゼラレムコトヲ望ム右建議ス

△建議委員會速記（三月二十四日）

午後一時五十八分開議

○漢那委員長　休憩前に引續き會議を開きます。日程第七、統計機構の整備强化に關する建議案、議案第二七號――提出者小柳君

○小柳牧衛君　本件は理由書に明かでありまする通り、大東亞共榮圏の建設及び統制經濟の運用の完璧を期する爲に、統計の行政機構を擴充强化すると共に、其の衝に當つて居りまする統計吏員の待遇を改善致しまして、さうして其の事務の刷新をなさしめんとする趣旨でございます。

大凡科學の發達及び之を基礎と致しまする國策の遂行上、統計の必要であると云ふことは論を俟たないのでありまするが、殊に總力戰の完勝及び共榮圏の建設と云ふものは、科學的組織的の企畫を要しまする關係上、今日統計の發達に俟つことは極めて切なるものがあると思ふのであります、更に又目下の重要國策でありまする生産力の擴充と、統制經濟又は計畫經濟の運用に付ては勿論、政治、軍事、厚生、文化し諸般の企畫を立案をするには、皆正確なる統計に依らなければならぬのでありまして、此の必要より統計の行政機構の强化擴充を要することは明瞭であると思ふものであります、此の

統計の機構を强化致しまするに付きまして先づ第一に考へますることは、統計の行政機構の一元的の强化をすると云ふことであります、統制經濟とか或は計畫經濟をやつて居る國、又は今回の戰爭に參加して居る國に於きましては、統計機構を可なり大きく而も一元的に統一して居るものが多いと云ふことを聞いて居るのであります が、勿論我國に於きましては一切の統計を一元的に統一すると云ふことは色々困難なる事情もありませうし、殊に日常の事務に統計と云ふものが各廳に於て各々必要がありますので、之を全部統一すると云ふことは困難ではありませうが、併し之を出來得るだけ一元的に强化すると云ふことは、目下の時局に照しまして必要であると思ふのであります、例へば統計の行政機構が分れて居ります爲に、重複して色々の資料を取ると云ふやうなこともありませうし、又調査項目を少し加減を致しますると、他の官廳に於て重要なる資料も得らるることも少くないのでありまして、是等の調査項目の統制を圖ると云ふ意味に於きまして、行政機構の一元强化が必要ではないかと思ふのであります、又或る官廳に於きましては折角資料を取つたけれども、其の中一小部分だけが直接自分の方に必要であると云ふので、殆ど大部分の資料は之を空しく書架に連れて居ると云ふ實例を私は現に知つて居るのでありまして、此の資料の中には極めて重要なる資料も潜んで居ると思ふのでありまして、是等の資料を十分利用すると云ふことの爲には、どうしても一元的に强化した所の大きなる統計の行政機構が必要ではないかと思ふのであります、又今日統計に付きまして物足りないと世間から言はれて居ることは、正確ではありますけれども、迅速でない爲に時期を逸すると云ふことであります、勿論統計は正確なることを必要とは致しますが、物に依りましては、さう綿密でなくても、概數だけでも早く知りたいと云ふやうなことも少くないと思ふのであります、それの爲にはどうしても十分なる事務員があつて、早く之を處理すると云ふことが必要であるのであります、或る官廳に於ては統計の手が足りないと云ふやうなことを考へて見ますと、一元的に統計の行政機構を强化擴充すると云ふことが必要ではないかと思はれるのであります。

次に行政機構に付て考へられますることは、研究機關の擴充と云ふことであります、最近統計學、殊に數理統計學の進歩發達と云ふものは、從來のやうな大學專門學校に於ける統計研究機關だけでは少しく狹いではないかと思はれるのであります、御承知のやうに所謂新派統計學と云ふものの發達、引續きまして最近數理統計の異常なる發達と云ふものは、從來のやうに單に文科的の方面の研究を以て足りる譯ではなく、どうしても理科系統の智識を十分に要するのでありまして、文科、理科相連絡を以ちまして此の進歩せる統計を研究する必要が極めて痛切なるものがあると思ふのであります、左樣なる譯合から致しまして、此の統計研究機關を擴充することが必要ではないかと思ふのであります。

其の二は統計の科學研究所とも云ふべき一つの研究所を置きまして、統計の實務を目標と致しまして、綜合的に理論と實際の研究をする爲に、大學であるとか或は內閣等に於きまして、統計科學の研究所を、設置するの要があるのではないかと思ふのであります、殊

に此の頃所謂公算論或は確率論の應用の傾向が非常に強いのでありまして、是等の應用を十分ならしむると同時に、又最近計算器とか集計器と云ふものが實に綿密になつて來て、非常に進歩發達をして居るのでありまし、是等の統計科學の研究所を設けることが必要ではないかと思ひます、尙ほ此の統計研究所に於きましては一時統計技術員の養成に當りまして、實際の技倆のある、又統計技術に堪能なる所の吏員を養成するやうにしたならば、洵に時代の要求に合つて居るものではないかと思ふのであります。

第三に考へさせられますことは、統計事務員の改善を圖るといふことであります、何事も機構が如何に良くありましても、それに當る人が適當でありませぬければ成績の擧がらぬことは勿論であります、此の統計事務に當る人を一層良くすると云ふには、先づ第一に教養を十分ならしむることが必要であると思ふのであります、今日我が國に於きましては、專門學校以上に於きましては統計學を課しては居りますけれども、統計の實務に付ての養成は甚だ十分でないと思ふのであります、內閣に於きましては統計職員養成所を設けて居るやうでありますが、併し其の定員たるや僅かに八十名、殊に今年の狀況を見ますと、僅かに四十名でありまして、而も其の期間たるや僅かに二箇月に過ぎないやうであります、又是等の人に對する補助金の如きも、一箇月二十圓と云ふやうな極めて薄いものでありまして、甚だ教養の徹底には不十分であると思ひますし、又學科等も見ましても、多くは製圖、製表に關する科目が多いのでありまして、是は實務上必要ではありませうけれども、もう少し深遠なる所の學理を教へると同時に、長期に亘つて十分の練磨をせしむることが必要ではないかと思ふのであります、前統計事務　當る人の待遇の改善でありますが、どうしても待遇を良くしませぬければ、良い人を十分に集め、良い人を十分に働かせると云ふことが、事實上困難と思ふのであります、先年統計の衝に當る人に、待遇官でなく本官を充てることになつたのでありまして、此の點だけでも非常に統計事務に當る人の志氣を鼓舞したと思ふのであります、一層此の方面に於　力を盡さることが適切ではないかと思ふのであります、御承知のやうに統計の仕事は極めて地味であつて、又非常に隱れたる勞が多いのでありまして、是は十分に優遇するの必要があるではないかと思ふのであります、私は或る役所　付て調べました時に、統計に當る人に近眼が非常に多いと云ふことを認めたのでありまする、是は其の一例に過ぎませぬが、要するに統計に當る人の勞苦と云ふものは並大抵ではないと思ひます、而も其の扱つて居る仕事が國策の基礎を確立する上に於て、極めて重大であると云ふことを考へますならば、一層其の待遇を良く致しまして、さうして統計事務の刷新を圖ることが必要であらうと思ふのであります、目下農林省に於かれましては地方農林統計費補助規則がありまして補助を出して居るやうでありますが、其の統計に關する經費の支出の財源に付きましても、十分に尙ほ圖として考慮する必要があるではないかと思ふのであります。

以上のやうな觀點に於きまして私は時局の立場から、又現在の統計の狀況に照らしまして、此の際是非とも統計の機構を擴充强化し

て、さうして一面統計に當る人の地位を高め優遇して、立派な統計の出來るやうにしたいと思ひまして、此の建議案を提出した次第であります、どうぞ愼重審議の上、何卒可決あらんことを切に御願ひする次第でありますが、之に對する政府の御所見を承りたいのであります。

それに付きまして此の機會に一、二政府に對しまして、御尋ねを致したいのでありますが、先づ第一に、先刻も申しましたやうに、近年統制經濟を執つて居る所の國或は今度の戰爭に參畫して居る所の國に於きましては、統計の行政機構を非常に擴大强化して居ると云ふことを聞いて居ります、是は苟くも戰爭のやうな大きなる仕事をする場合には、綿密なる計畫を立てる必要のあることは勿論で、又統制經濟と云ふものをやります以上は、やると同時に其の基礎である統計の機構を十分に强化する必要がありまして、是は嘸や外國に於てやつて居ることと思ふのでありますが、統制經濟をやつて居る國の實情、或は戰爭に參畫して居る所の國の統計機構の狀況を御知らせ願ひたいと思ふのであります、

第二には、我が國は明治の初めより非常に統計には力を入れて居つたのでありますが、明治十九年に既に統計に付ての太政官の訓令であつたかと思ひまするが出て居ります、其の後大正五年に內閣訓令の第一號を以て統計の進步改善に關する訓令が出て居りまして統計を非常に尊重して居るのであります、既に統制經濟をやり、而も今度の重大なる時局に直面して居りまする以上、近年統計に付きましては十分に政府と致しましても力を入れて居ることと思ふのであります、殊に仕事は最近非常に殖えまして、或は勞働統計であるとか、或は家計調査であるとか、或は農林水產の統計であるとか、或は會社統計であるとか、色々の統計が續々出て參つて居るのでありまして、機構の上に於ても必ずや强化して居るものと思ふのでありまするが、最近どんな風に政府は此の統計に付て力を入れて、行政機構の擴充强化をなして居るのでありますか實は是は甚だ餘談に亘るやうでありますけれども、今度の議會には統計に關する政府委員が任命されて居らなかつたやうな爲に、つい昨日も政府の所見を政府委員より聽くの機會を持たなかつたのであります、聞けば是は法律案がない爲に政府委員を任命しなかつたと云ふのでありまするが、恐らくはさう云ふことであつて、決して統計を輕視する譯ではないでせう、併し斯う云ふことが又日本全國統計に從事して居る所の數萬の吏員の志氣に影響すること と思ふのでありまして、私はさう云ふ見地から致しましても、どうしても政府が統計に付て非常に力を入れて居ると云ふことを玆に如實に力を入れて居ると云ふことを、玆に如實に示す必要があると思ふのでありますが、どうぞ最近に於きまする統計の行政機構の强化の實例を御示しを願ひたいと思ふのであります。

第三には統計吏員の俸給は私はどうも他の吏員に比べて低いのではないかと思ふのであります、例へば市町村等に於きましても極く地位の低い人殊に初めて吏員になつたやうな人を統計に廻はすと云ふことが實情であります、どうもさう云ふことから考へて見ますると、統計吏員の俸給は他の吏員に比較致しまして、低いのではない

かと思ひますが、果してどう云ふ平均になつて居りますか國、府縣、市町村等に分けて御示しを願はれますれば、洵に結構であると思ふのであります、つい言ひ洩らしましたが、若し最近に於て我が國が統計に力を入れて居ると云ふことを言ふことが、或は遠慮しなければならぬと云ふことでありますれば、其の事は別に强いて御洩らしを願はなくとも宜しいのであります。

以上の點を御尋ね致しまして、政府の所見を伺ひまするとと同時に、本案を可決あらんことを切に御願ひする次第であります。

(以下六月號發表)

●昭和十八年家計調査家計簿記入方向上調査員指導及事務打合會開催

統計局に於ては昭和十八年家計調査家計簿記入方向上に關し、二月十五日より四月二十四日に至る間に於て、森勞働課長其の他二十三名の局員を全國各府縣に派遣して、家計調査員並家計調査指導員に對する徹底的指導と事務打合を行ひ、之が完遂上万全を期したが、各派遣官及擔當府縣名を掲げれば左の通りである。

(那須書記官) 香川・愛媛 (河原書記官) 山梨・愛知 (森統計官) 大分・宮崎・東京・奈良 (望月統計官) 福岡・長崎 (中山統計官) (高津統計官) 北海道・群馬・山口・東京 (篠原統計官) 新潟・埼玉 (林統計官補) 岩手・宮城・神奈川 (平井統計官補) 靜岡・京都・秋田・栃木 (吉田統計官補) 大阪・兵庫・福島・茨城 (矢野統計官補) 富山・長野 (山田統計官補) 鳥取・岡山・東京 (關口統計官補) 廣島 (宮本統計官補) 福井・岐阜 (小田部統計官補) 北海道 (公木平統計官補) 石川・千葉 (高屬) 佐賀・熊本 (加藤屬) 鹿兒島 (甲高屬) 德島・高知 (島田屬) 青森・山形 (竹内屬) 三重・和歌山 (倉田屬) 滋賀・島根 (馬場屬) 石川・千葉 (石關屬) 香川・愛媛 (長澤屬) 奈良

●道府縣官房長會議に於ける川島統計局長の說明

川島統計局長は三月二十三日內務省に開催せられた道府縣官房長會議に列席の上、「各國に於ける統計の現狀と其の總力戰との關係」に付き委曲說明して參考に資するところがあつた。

(本誌論說欄參照)

●群馬縣統計協會總會に於ける川島統計局長の講演

群馬縣統計協會に於ては、四月二十八日午前十時より前橋市群馬縣教育會館に於て第七回通常總會並統計功勞者表彰式を擧行したが、同日統計局よりは特に川島局長臨席、約一時間に亘り「各國の統計事情」と題する時局下統計事務關係者の活動に示唆多き講演があつた。

●朝鮮勞働技術統計調査事務打合會開催

朝鮮總督府主催朝鮮勞働技術統計調査事務打合會は四月十三日及十四日の兩日、京城府恩賜科學館に於て開催せられたるが、統計局よりは福永人口課長關森統計官補を隨へて臨席指導の上、時局下統計關係者の覺悟につきて意義深き講演があつた。

●**統計局員慰安**　統計局に於ては同局集計員二千六百人が平素の獻身的職域奉公に對して慰安を與ふると共に、同局關係軍人遺家族全員を招待して慰安感謝の衷情を表する目的を以て、參加者及招待者を三班に別ち、四月二十六日より二十八日に至る三日間、毎日午後一時より四時迄、青山會館大講堂に於て曲技、講談・落語・浪曲・歌謡曲・漫藝・漫才等に各一流演技者を網羅した局員慰安演藝會を開催した。

●**本協會の統計功勞者表彰**　本協會は從來柳澤統計記念事業の一として多年道府縣統計事務に從事し功勞顯著な職員が退職せられるに當つて之を表彰し來つたが今回又左記四氏を表彰することゝなり夫々本協會長名を以て感謝狀及記念品を贈呈した。

感謝狀（各道）

（昭和十八年三月十九日附）　松戸定吉
（昭和十八年三月二十五日附）　加地成雄
（昭和十八年三月二十六日附）　吉永敏夫
（昭和十八年三月三十日附）　藪田武二

多年地方統計事務ニ精勵シ我國統計界ノ爲ニ盡サレタル處洵ニ勘カラズ仍テ本會ハ記念品ヲ贈呈シテ玆ニ感謝ノ意ヲ表ス

年　月　日

東京統計協會會長正二位勳一等　窪田靜太郎

●**新入會者**

男爵　平山洋三郎（通常會員）　農林省統計課

集　報

寺尾　琢磨（通常會員）　大森區池上町二九五
石井　眞（通常會員）　統計局
石關　一照（通常會員）　統計局
長澤　七郎（通常會員）　統計局

地方通信

●**愛知縣**（深尾重省報）

▲**昭和十八年度統計事務優良町村視察計畫**

愛知縣統計協會にては昭和十六年度以降五箇年計畫に依り、縣下市町村統計事務主任者をして統計事務僧良町村を視察せしめつゝあるが、昭和十八年度に於ては左記計畫に依り實施することゝなつた。

一、視察月日　五月七日ヨリ三日間
一、視察地　岡山縣吉備郡生石村　千葉縣山武郡成東町
一、視察者人員數　三十一名　二十八名
一、引率者數　縣係員一名　同上
一、協會補助　一名ニ付十圓　同上

●**佐賀縣**（鈴木稔報）

▲**人口職業調査の施行**

佐賀縣下では本年一月十五日現在を期して縣下人口の一齊調査を

施行した。現下各種物資の配給に或は勞務の徵用に或は企業の整備に、正確なる人口の把握が喫緊の要務とされてゐる折柄、各方面から格別の期待が懸けられてゐたが、この調査も三月末には成功裡に全縣下の集計を了し、四月よりは砂糖の、五月よりは米の、その他の物資についても配給基礎として利用せられてゐる。

●香川縣　（安藤一雄報）

▲昭和十七、八年度前期教育統計報告研究竝集合審査會の開催

香川縣に於ては時局下教育統計の國家的要請益々重きを加へ來れる實情に鑑み、教育統計の整備充實を圖り、報告の正確と迅速を期する爲、安藤統計課長陣頭指揮のもとに四月八日より二十三日に至る間に於て縣内九箇所に縣下各教育統計主任を招集し、昭和十七、八年度前期教育統計報告研究研究竝集合審査會を開催した。

●奈良縣　（調査課報）

▲家計調査記入者懇談會開催

昨年十月一日より繼續實施中の昭和十八年家計調査の完璧と銃後拾ざなき決戰統計の完遂を圖るべく奈良縣調査課に於ては森統計局勞働課長を迎へて四月二十七日及二十八日の兩日縣市共催の下に記帳者調査員等關係者約百名の會合を促し、調査の趣旨及び記入上の諸注意につきて種々懇談したるが、第一日は午前九時より奈良會館に於て給料生活者、商家を、第二日は午前十時よりあやめ池温泉場に於て農家世帶を招集し、之れが指導を行つた。尙縣に於ては之等の記入者に對し平素の勞を犒ふべく、記念品をも贈つた。

●群馬縣

▲學事年報事務打合會の開催（富岡恒治郎報）

昭和十七年度學事年報々告取纒めに當り互審會と併せて各市町村學事年報事務主任者會議を四月十二より十七日に至る六日間縣下十一箇所に開催した。會議の指示及注意事項は左の通りである。

△指示―報告期限の勵行、調査の正確、關係法令及例規類の整備竝に研究、學校、圖書館、幼稚園、青年團等と聯絡協調、昭和十八年度分學事年報々告

△注意―甲號表、乙號表

▲縣統計協會主催統計功勞者表彰式竝第七回通常總會の開催

群馬縣統計協會に於ては四月二十八日縣教育會館に於て統計功勞者表彰式竝第七回通常總會を開催し此の機會に川島統計局長の臨場を得て記念講演會を開催した。

其の狀況左記の通り

○統計功勞者表彰式

本縣統計協會に於ては通常總會の開催の機會に恒例により統計功勞者として市町村統計關係者及其の他關係者より左記三十七名の表彰式を擧行することとなり去る四月二十八日の午前十時より縣教育會館講堂に於て關係各局省及縣下來賓諸名士多數臨席の下に表彰式を擧行し西尾會長より夫夫賞狀竝賞品を授與し盛會裡に終了した。

記

表彰者

勢多郡桂萱村長　田村庄作

以下順以次別紙の通

表彰狀

多年統計事務ノ改善發達ニ盡力シ其ノ功績尠カラス仍テ統計功勞者表彰規定ニ依リ目錄ノ品ヲ贈呈シ玆ニ之ヲ表彰ス

昭和十八年四月二十八日

群馬縣統計協會長　從六位勳六等　西尾武夫

○統計協會總會並統計講演會

四月二十八日統計功勞者表彰式終了後引續き同所に於て本會第七回通常總會を開催し縣下市町村長及關係吏員等四百五十人出席昭和十六年度統計協會費決算報告の件、昭和十八年度統計協會費豫算報告の件及昭和十七年度會務報告等があつた。

總會終了後引續き統計講演會に移る

一、講師　統計局長　川島孝彦　閣下

二、演題　各國の統計事情

聽講者市町村吏員等四五〇名講堂超滿員講師演題に基き各國の統計發達狀況並前歐洲大戰より現時の大東亞戰爭に至る各戰時に於て密接不可分にある統計の使命效用等の講演を仰ぎ參會者一同に多大の感銘を與へ統計認識を一層深め正午有意義なる講演會を終了し會館玄關前に於て來賓名士の記念撮影を行つて盛會裡に散會した。

表彰者氏名一覽

市町村長及助役

市町村名	職	氏名
勢多郡桂萱村	村長	田村庄作
群馬郡金古町	町長	神保統武
碓氷郡磯部町	町長	田村京太郎
同郡東横野村	村長	遠間富平
佐波郡剛志村	村長	中島芳藏
邑樂郡郷谷村	村長	岩上辨一郎
吾妻郡原町	助役	片山捨五郎

市町村吏員

市町村名	職	氏名
勢多郡新里村	雇書記	北爪覺太郎

同郡黒保根村　書記　星野鐘彦
動八等
群馬郡倉田村　書記　角貝惣平
北甘樂郡下仁田町　書記　里見信造
碓氷郡安中町　書記　多胡長太郎
同郡白井町　書記　柴崎吉久
利根郡沼田町　書記　山本茂次
新田郡寶泉村　書記　坂本佐太三
山田郡相生村　書記　板井久藏

同郡原町　調査員　島村勘次郎
同郡伊參村　調査員　關昌平
利根郡池田村　調査員　宮田喜久治
同郡絲之瀬村　調査員　吉野英雄
同郡赤城根村　調査員　角田紋重郎
佐波郡剛志村　調査員　關口唯重
山田郡矢場川村　調査員　清水達利
邑樂郡梅島村　調査員　高澤長之助
同郡伊奈良村　調査員　蓮見幸三郎

資源調査員

市町村名	職氏名
前橋市	調査員　春山德太郎
高崎市	調査員　菊地伊勢作
同市	調査員　塚越都宗
群馬郡小野上村	調査員　佐藤市郎
多野郡八幡村	調査員　酒井竹三郎
同郡鬼石町	調査員　藤倉福太郎
北甘樂郡秋畑村	調査員　田村左平
同郡岩平村	調査員　吉江幸太郎
碓氷郡八幡村	調査員　櫻井萬吉
吾妻郡中之條町	調査員　劍持岩吉

其ノ他關係者

氏名	
北澤研治	情報局
中尾定一	同
	農林省統計課
	簡易保險局
	關東州廳

●寄贈圖書

寫眞週報（自二六八號至二六九號）
週報（自三四〇號至三四一號）
農林統計月報（第三十八號　四十八號）
事業概況（二月號）
關東局物價調査月報（第一五一　一五二號）

東京物價調(二月中)　日本銀行調査局
東京小賣相場調　四月)　同
經濟週報(第三三七三三八號)　景氣研究所
都市問題(四月號)　東京市政調査會
龍門雜誌(六五四號)　龍門社
工業奬勵(十一號)　工業奬勵館
出版文化(第五十四五十五號)　日本出版文化協會
氣象集誌(第二十卷第二十一卷第十二號第一號)　日本氣象學會
保險院醫學雜誌(第四十二卷第二號)　日本保險醫學會
一橋論叢(第十一卷第三號)　東京商科大學
農業經濟研究(第十八卷第四號)　農事經濟學會
農業教育(三月號)　日本農事教育會
神戸市の産業活動と港都の建設　神戸市調査室
國民經濟雜誌(第七十四卷第四號)　神戸商業大學
神戸市生活用品小賣價格指數月報(三月中)　神戸市役所
統計(四月號)　千葉縣統計協會
高知縣統計書(第一編)　高知縣
新亞細亞(四月號)　南滿鐵東亞經濟調査室

地方通信

統計・綠地

統計局内あけぼの會

富安風生先生選

映りゐる障子灯入りぬ菖蒲の芽　林　ひさし
大穴のあきし土橋や菖蒲の芽
花吹雪池をとだてし彼方にも　關森　刀郎
山吹に神苑の雨しづかなり
山吹に雨の池水增すばかり
山吹や足下にダムの谿展らけ　那須　龍堂
繩張つて通さぬ汀菖蒲の芽
立てられし名札のよき名菖蒲の芽
山吹の枯枝つん〳〵花乏し　福永　曾人
陶作る窓の下なり菖蒲の芽
山吹や藪の向ふの話し聲
山吹のこぼるる筧苗代へ
路のやゝ登りとなりし濃山吹　中村桐の花
山吹の門の名札に覺えあり
蝌蚪の水こゝにも淺くありにけり
國廢れたゞ一列の菖蒲の芽
石鹼玉はぢけて空の瑠璃深き

新らしき橋のゆき來に菖蒲の湯　坂入木實女
水潤れし池邊に崩む菖蒲の芽　宮本　武
空くわんに入れてもどりし蝌蚪一つ　那須　潤子　十二歳
山吹やまだ常會に間のあれば　齋藤八十四
麥畠の畦にも溢れ蝌蚪の水　林　白扇女
遮蔽幕垂れたる窓の若葉かな　山村まさし

社團法人 東京統計協會入會案內

一本會は統計の學理及方法の進歩普及を計るを目的とする學會にして明治十一年の創立に係る。

一本會は前項の目的を達せむが爲め講演會又は講習會を開き、機關雜誌「統計集誌」を發行し、會員の質疑に答へ、政府編纂の統計書及本會編輯の圖書を出版發行す。

一機關雜誌「統計集誌」は毎月一回發行し統計に關する論說、研究、講演、調査資料及內外統計界の事情等を紹介し、會員に無料配付す。

一本會に入會希望者は會員の紹介又は住所、氏名及職業を記し捺印したる入會申込書を本會事務所に送付せらるべし。

一會費は通常會員は一箇年分前金四圓、一箇月分金三十五錢終身會員は一時金五十圓を納付する者とす。

一諸官衙、學校及銀行會社等にして「統計集誌」購讀希望の向は其の旨申込まるべし、購讀料は前項通常會費に同じ。

一會員は本會發行の圖書購求の場合割引の特典あり。

定時刊行（毎月一回二十五日）
昭和十八年五月二十日印刷　（定價金參拾五錢）
昭和十八年五月廿五日發行

發行所　東京市麻布區富士見町一番地統計局內
社團法人 東京統計協會
（電話三田(45)一五七三番）
（振替口座東京一九四四番）

發行兼編輯者　東京市麻布區富士見町一番地統計局內
蜂須賀幾次郎

印刷者　東京市京橋區京橋二丁目十三番地ノ一
松崎才一郎

印刷所　東京市京橋區京橋二丁目十三番地ノ一
東亞印刷株式會社
（電話京橋二三四、二三五番）（東東五五）

年代 900部 P130頁
2800部

東北産業研究

第八號

昭和十八年二月

調査研究

東北地方會社營業狀況……經濟調査科……(一)
東北地方農業の生産諸條件……農林水産科……(一三)
津輕リンゴ經濟史の展開……櫻庭一男……(四四)

說苑

東北地方に於ける畜産と有畜農業……釘本昌二……(五二)
岩手縣下に於ける刈分小作慣行と時局下其の勢巡の概況……長谷川良二……(六一)
亞炭の現狀及び將來……龍野昌之……(七二)

資料

東北地方に於ける木材統制會社の概要……(八二)
企業整備令概說……(九一)
食料管理法と食糧營團……(九八)
統制會一覽……(一〇三)
東北地方の主要化學工業藥品……(一〇五)
東北地方食料品統計……(一三)

雜錄

財團法人 東北産業科學研究所

調査研究

東北地方會社營業狀況

經濟調査課

昭和十七年上期は大東亞戰爭勃發以來共の赫々たる戰果と共に南方各占領地域に於ける經濟工作も著々進捗し、一面國內の產業經濟も過去の英米依存より完全に脫却して、大東亞共榮圈の確立を目指す計畫的產業經濟が實現の緖に著いた劃期的な時期であつた。勿論共榮圈內に於ける資源の開發と內地への物資の交流には尙相當の時日を要する所であり、本年上期の各事業會社の業績は戰爭遂行に伴ふ物資、勞力、輸送等の關係、或は未稼働遊休設備及び資本の增大、壓迫等の事情に因り全體的に見て未だ必ずしも好轉を見たとは云へない。今回調査せる東北地方を事業地とする事業會社及び東北地方を主要事業地とする事業會社の營業狀況に於ても同樣の影響を免かれなかつた。然しながら東北地方に於ける各種事業の目的が單なる不振地域の振興開發に止まらず、國家の要求する高度國防國家建設の一環として重要なる役目を果しつゝある現狀より見て、各事業會社の營業狀況が一部の業種を除き全般的に未だ低調の域を脫し得ないのは建設過程に於ける過渡的現象として蓋し已むを得ない所であらう。

業種別事業成績總括表

	昭和十六年上期			昭和十六年下期			昭和十七年上期		
	收益率	配當率	保留率	收益率	配當率	保留率	收益率	配當率	保留率
	東北 全國	東北 全國	東北 全國	東北 全國	東北 全國	東北 全國	東北 全國	東北 全國	東北 全國
機械工業	一一・七 一六・二	六・九 八・二	五五 四六	九・五 一五・九	五・五 八・二	五五 四九	九・四 一四・九	六・二 八・二	六八 四一
化學工業	一二・四 一四・三	七・六 九・二	三一 三三	一二・九 一三・七	七・二 九・三	三三 三〇	八・八 一三・一	六・〇 九・二	二九 三三
金屬工業	一四・五 一三・六	七・四 八・一	四五 三八	八・七 一〇・八	四・四 七・六	四六 三七	九・三 一三・〇	四・一 七・九	五三 三八
窯業	九・〇 一三・三	七・六 九・一	一三 三三	九・六 一二・一	八・一 八・三	一三 三三	八・九 一〇・一	七・七 八・一	一六 一六
纖維工業	一五・九 一三・七	九・八 一二・〇	五五 四六	一七・九 一九・九	六・二 一三・〇	六〇 三七	一六・〇 一七・六	七・〇 一三・〇	五〇 二九
瓦斯業	九・六 一三・二	六・〇 八・七	二九 三〇	九・一 一四・四	五・九 九・〇	二八 三三	八・九 一四・〇	五・五 九・〇	三一 三一
運輸業	一一・九 一三・四	五・五 七・九	四九 三八	九・二 一三・九	三・九 七・九	一一 三六	一九・七 一三・三	五・四 七・六	一四 五五
鑛業	— 一三・二	— 八・七	— 三三	一五・七 一三・〇	四・四 八・九	八六 二九	七・九 一三・四	四・五 五・九	五六 三七

備考　全國の數字は三菱經濟研究所調に據る。

調査會社四〇社（機械工業九社、化學工業七社、金屬工業四社、窯業三社、纖維工業三社、瓦斯業三社、運輸業五社、鑛業二社、商業四社）に就き概觀するに、拂込資本金の前期に比し著しく增大した業種は化學工業（一二三・八%）金屬工業（九・五%）等であつた。純益金は運輸業（三〇・二%）、金屬工業（一六・三%）等が著しく增加し、一方減益を示した業種として鑛業（四七%）、纖維工業（一五・九%）等が顯著であつた。拂込資本收益率に於ては金屬工業、運輸業の二業種が上昇したに止まり、その他の業種は低下を示した。

株主配當金は前期に比し機械工業（一七%）、纖維工業（六%）等の增加が著しく、一方減少を示した業種としては瓦斯業（七・二%）が最大であつた。配當率に於ては機械工業、纖維工業、運輸業、鑛業の四業種が上昇し、化學工業、

金属工業、窯業、瓦斯業、商業の五業種が低下を示した。

社内保留額は前期に比し著しき増加を示した業種として運輸業（六一・一％）、金属工業（三二・三％）等が擧げられ、一方減少の著しき業種は鑛業（七六・四％）、商業（四三・七％）、繊維工業（二九・一％）、化學工業（二八・一％）等であつた。保留率に於ては金属工業、瓦斯業、運輸業の三業種が上昇したに止まり、その他の業種は低下を示した。以下各業種別に諸數字を掲げ考察を試みることゝする。

業種別業績二期比較表

業種	拂込資本收益率 上昇	拂込資本收益率 不變	拂込資本收益率 低下	配當率 上昇	配當率 不變	配當率 低下	社内保留率 上昇	社内保留率 不變	社内保留率 低下
機械工業	二社	—	六社	二社	六社	—	二社	三社	三社
化學工業	一社	—	六社	一社	五社	一社	—	二社	五社
金属工業	二社	一社	一社	—	四社	—	二社	二社	—
窯業	—	—	二社	—	二社	—	—	二社	—
繊維工業	二社	—	一社	—	三社	—	—	—	三社
瓦斯業	二社	—	一社	—	二社	一社	三社	—	—
運輸業	三社	—	二社	二社	二社	一社	一社	二社	二社
鑛業	一社	—	一社	—	一社	一社	一社	一社	—
商業	一社	—	二社	—	二社	一社	一社	一社	一社

備考　新加入調査會社三社を除く。

（一）機械工業

調査會社	公稱資本金	拂込資本金

秋木機械製作所	四、〇〇〇、〇〇〇圓	三、二五〇、〇〇〇圓
福島製作所	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇
岩手鐵工所	六〇〇、〇〇〇	六〇〇、〇〇〇
東北振興精密機械	一、五〇〇、〇〇〇	一、一二五、〇〇〇
東北船渠鐵工	二、五〇〇、〇〇〇	一、三七五、〇〇〇
東北重工業	一、九五〇、〇〇〇	一、九五〇、〇〇〇
東北振興農機	九八〇、〇〇〇	九八〇、〇〇〇
盛岡精器製作所	五〇〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇
岩木精機工業	五〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇

備考　調査會社の變更―日電電波工業（拂込資本金四〇〇、〇〇〇圓）、山形發動機（拂込資本金五〇〇、〇〇〇圓）二社除籍。東北振興農機（東北振興山形發動機、酒田農機工業、秋田農機具三社合併）一社加入。

	拂込資本金	純益金	收益率	配當金	配當率	社内保留額	保留率
十六年上期	一〇、七〇〇、〇〇〇円	六二六、七五円	二・七%	三六七、三六八円	六・九%	三三、〇一六円	三五%
十六年下期	一三、四五〇、〇〇〇	五九二、〇八一	九・五	三四三、九四四	五・五	二〇九、二一三	三五
十七年上期	一三、〇三〇、〇〇〇	六二三、四九七	九・四	四〇三、四五六	六・二	一六九、四九一	六

調査會社の變更、福島製作所の全額拂込等により拂込資本金は前期に比し五八〇、〇〇〇圓（四・七%）を增加し、收支比率は九〇%より九一%に惡化したが、回轉率は對拂込資本（一・〇〇より一・〇八）、對使用總資本（〇・四七より〇・五〇）、對固定資產（〇・八五より一・一四）の各項目に亘り上昇した。純益金は前期に比し二〇、四一六圓（三・四

%）を増加し、收益率は對拂込資本（九・五%より九・四%）が輕微ながら低下したが、對株主資本（八・五%）、對使用總資本（四・四%）は前期と同率を示した。利益處分に於ては配當率が五・五%より六・二%に上昇したのに對し、保留率は三五%より二八%に低下した。

（二）化學工業

調査會社	公稱資本金	拂込資本金
鐵興社	二〇、〇〇〇、〇〇〇圓	一七、〇〇〇、〇〇〇圓
日東化學工業	二〇、〇〇〇、〇〇〇	一七、〇〇〇、〇〇〇
東北振興化學	一〇、〇〇〇、〇〇〇	八、〇〇〇、〇〇〇
東北振興パルプ	五〇、〇〇〇、〇〇〇	三七、〇〇〇、〇〇〇
日本製藥工業	五〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇
東北振興アルミニウム	一〇、〇〇〇、〇〇〇	七、五〇〇、〇〇〇
東亞輕金屬工業	三、五〇〇、〇〇〇	三、五〇〇、〇〇〇

備考　調査會社の變更―東北振興ゴム（拂込資本金三〇〇、〇〇〇圓）一社除籍。

	拂込資本金	純益金	收益率	配當金	配當率	社内保留額	保留率
十六年上期	五、〇〇〇、〇〇〇円	三、二四八、二八九円	一一・四%	二、二四三、七〇〇円	七・六%	一、〇五九、〇八九円	三%
十六年下期	七三、五三五、〇〇〇	四、三五九、二八六	一二・九	二、六五三、六三五	七・二	一、六一〇、四七九	毛
十七年上期	九一、〇〇〇、〇〇〇	三、九八六、七五一	八・八	二、七三五、〇〇〇	六・〇	一、一五八、四五一	元

調査會社の拂込資本金は東亞輕金屬工業の全額拂込により前期に比し一七、四七五、〇〇〇圓（二三・八%）の著しき

増加を示し、收支比率は八七%と今期も前期と同率であつたが、回轉率は對固定資産（〇・五三より〇・六一）の上昇を除き、對拂込資本（〇・八六より〇・六八）、對使用總資本（〇・四八より〇・四五）は夫々低下した。純益金は前期に比し三七二、五三六圓（八・五%）を減少し、從つて收益率は對拂込資本（一一・九%より八・八%）、對株主資本（九%より八・二%）、對使用總資本（六・六%より六%）の各項目に亙り低下を示した。利益處分に於ては配當率が七・二%より六%に低下すると共に、保留率も三七%より二九%に低下した。

（三）金屬工業

調査會社	公稱資本金	拂込資本金
秋田製鋼	二、五〇〇、〇〇〇圓	二、五〇〇、〇〇〇圓
東北金屬工業	一〇、〇〇〇、〇〇〇	八、五〇〇、〇〇〇
山形電鋼	一九五、〇〇〇	一九五、〇〇〇
國產輕銀工業	六、〇〇〇、〇〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇

	拂込資本金	純益金	收益率	配當金	配當率	社內保留額	保留率
十六年上期	九、六五、〇〇〇円	七〇四、五三三円	一四・五%	三七、五〇〇円	七・四%	三一九、〇三三	四五・三
十六年下期	一五、六五、〇〇〇	六六六、五四八	八・七	三四五、〇〇〇	四・四	三三三、五四八	四八・四
十七年上期	一七、一五五、〇〇〇	七八八、七四四	九・三	三五三、九四三	四・一	四一四、八〇三	五三・一

調査會社の拂込資本金は東北金屬工業の增徵により前期に比し一、五〇〇、〇〇〇圓（九・五%）の增加を示し、收支比率は八〇%より七五%に良化し、回轉率は對拂込資本（〇・〇七より〇・四〇）、對使用總資本（〇・〇五より〇・一六）、對固定資產（〇・〇五より〇・五〇）の各項目に亙り上昇した。純益金は前期に比し一一二、一九六圓（一六・三%）の

著しき増加を示したが、收益率は對拂込資本（八・七％より九・三％）の上昇を除き、對株主資本（一〇・七％より七・九％）、對使用總資本（五八％より三・五％）は夫々低下した。利益處分に於ては配當率が四・四％より四・一％に低下したのに對し、保留率は四六％より五二％に上昇した。

（四）窯業

調査會社	公稱資本金	拂込資本金
磐城セメント	四一、五〇〇、〇〇〇圓	三二、二七五、〇〇〇圓
岩手窯業	一五〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇
東北窯業	一、二〇〇、〇〇〇	一、二〇〇、〇〇〇

備考　調査會社の變更―東北窯業一社加入。

	拂込資本金	純益金	收益率	配當金	配當率	社内保留額	保留率
	円	円	％	円	％	円	％
十六年上期	三三、〇三五、〇〇〇	一、〇三六、八四五	九・〇	八七八、五〇〇	七・六	一九、三四五	三
十六年下期	三三、四三五、〇〇〇	一、三九九、三七五	九・六	一、三二四、三三三	八・一	二〇〇、四四二	一三
十七年上期	三三、六三五、〇〇〇	一、四九六、七七〇	八・九	一、二九一、〇〇〇	七・七	一六五、七七〇	一二

調査會社の拂込資本金は東北窯業の加入により前期に比し一、二〇〇、〇〇〇圓（三・七％）を增加し、收支比率は九〇％より八九％に良化したが、回轉率は對固定資產（〇・九六より一・〇七）が上昇したのに對し、對拂込資本（〇・九九より〇・八四）は低下し、對使用總資本は前期と同率の〇・四九を示した。純益金は前期に比し六二、六〇五圓（四％）を減少し、收益率は對使用總資本四・七％より五・二％）の上昇を除き、對拂込資本（九・六％より八・九％）對株主資本（七・九％より七・五％）は夫々低下した。利益處分に於ては配當率が八・一％より七・七％に低下すると共に保留率

も一三%より一一%に低下した。

(五) 繊維工業

調査会社	公称資本金	拂込資本金
宮城縣毛共榮織絲	一、二〇〇、〇〇〇圓	一、二〇〇、〇〇〇圓
東北振興繊維工業	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
仙臺染織製絲	一、〇〇〇、〇〇〇	三七〇、〇〇〇

備考　調査會社の變更―東北ミツボシ繊維（拂込資本金一七〇、〇〇〇圓）一社社除籍。

	拂込資本金	純益金	收益率	配當金	配當率	社内保留額	保留率
十六年上期	二、〇五〇、〇〇〇円	一、九三〇、〇六九円	五・九%	一、二五、五〇〇	九・八%	六六、六九円	五〇
十六年下期	二、四〇、〇〇〇	二四、五六	一七・九	六、二六	六・二	一四六、三一	六〇
十七年上期	二、五〇、〇〇〇	二〇五、六六	一六・〇	九〇、四〇〇	七・〇	一〇三、一六六	五〇

調査會社の變更により拂込資本金は前期に比し一七〇、〇〇〇圓（六・二%）を減少し、收支比率は九四%より九六%に悪化したが、回轉率は對使用總資本（三・三〇より一・一九）の低下を除き、對拂込資本（三・一二より四・四六）、對固定資産（三・一一より六・三三）は夫々上昇した。純益金は前期に比し三八、九三〇圓（一五・九%）を減少し、從つて收益率は對拂込資本（一七・九%より一六%）、對株主資本（一四%より一二・五%）、對使用總資本（八・七%より四・三%）の各項目に亘り低下した。利益處分に於ては配當率が六・二%より七%に上昇したのに對し、保留率は六〇%より五〇%に低下した。

(六) 瓦斯業

調査會社	公稱資本金	拂込資本金
福島瓦斯	三〇〇〇〇〇圓	一二〇、〇〇〇圓
盛岡瓦斯	二五〇、〇〇〇	二二五、〇〇〇
山形瓦斯	三〇〇、〇〇〇	一八〇、〇〇〇

	拂込資本金	純益金	收益率	配當金	配當率	社内保留額	保留率
十六年上期	六六〇、〇〇〇円	三一、七三三円	九・六%	一九、八〇〇円	六・〇%	九、三三三円	二九%
十六年下期	五五五、〇〇〇	三三、九四〇	九・一	一五、五五五	五・九	六、六一五	二八
十七年上期	五五五、〇〇〇	三三、二五〇	八・九	一四、四〇〇	五・五	七、一五〇	三一

調査會社の拂込資本金は前期と同額の五二五、〇〇〇圓を示し、收支比率は八一%より八二%に悪化したが、回轉率は對拂込資本（〇・四七より〇・四八）、對使用總資本（〇・三三より〇・三八）、對固定資産（〇・二七より〇・四二）の各項目に亘り上昇した。純益金は前期に比し一、一二五圓（七・二%）を減少し、從つて收益率は對使用總資本（六・四%より七・〇%）を除き、對拂込資本（九・一%より八・九%）、對株主資本（七・五%より七・二%）は夫々低下した。利益處分に於ては配當率が五・九%より五・五%に低下したのに對し、保留率は二八%より三一%に上昇した。

(七) 運輸業

調査會社	公稱資本金	拂込資本金
三陸汽船	一、〇〇〇、〇〇〇圓	七五〇、〇〇〇圓

宮城電氣鐵道	六、五〇〇、〇〇〇	五、七五〇、〇〇〇	
秋保電氣軌道	八〇〇、〇〇〇	五九〇、〇〇〇	
雄勝鐵道	五四七、六〇〇	五四七、六〇〇	
青森臨港倉庫	六〇〇、〇〇〇	五三〇、〇〇〇	

備考　調査會社の變更―鹽釜運運（拂込資本金六〇〇、〇〇〇圓）、盛岡運運（拂込資本金一三八、〇〇〇圓）、仙臺合同運送（拂込資本金六〇〇、〇〇〇圓）、十和田鐵道（拂込資本金四〇〇、〇〇〇圓）、仙臺鐵道（拂込資本金一、〇〇〇、〇〇〇圓）、栗原鐵道（拂込資本金六〇〇、〇〇〇圓）、岩手鑛業輸送（拂込資本金一〇、〇〇〇、〇〇〇圓）、岩手炭礦鐵道（拂込資本金一〇、〇〇〇、〇〇〇圓）八社除籍。

	拂込資本金	純益金	收益率	配當金	配當率	社内保留額	保留率
十六年上期	八、九三、〇〇〇円	三三、〇五六円	二・九%	二四、一八一円	五・五%	二六三、三三五円	四九%
十六年下期	一三、四五、六〇〇	六二七、五九三	九・二	二六八、九三一	三・九	三九、四二一	一
十七年上期	八、一六七、六〇〇	八〇三、八六九	一九・七	二三、三〇〇	五・四	五四、六六九	四

調査會社が日本通運による統合、その他の理由で著しき變更を見た結果、前期との比較は困難であるが、拂込資本金は五、二八八、〇〇〇圓（三九・三%）の激減を示し、收支比率は八五%より七二%に良化し、回轉率は對拂込資本（〇・六三より〇・七一）、對使用總資本（〇・二七より〇・四六）、對固定資産（〇・三四より〇・五六）の各項目に亘り上昇した。純益金は前期に比し一八六、二七六圓（三〇・二%）の激增を示し、從つて收益率は對拂込資本（九・二%より一九・七%）、對株主資本（五・一%より一四・五%）、對使用總資本（三・九%より一二・五%）の各項目に亘り著しき向上を示した。利益處分に於ては配當率が三・九%より五・四%に上昇すると共に保留率も一一%より一躍六四%に上昇した。

(八) 鑛業

調査會社	公稱資本金	拂込資本金	拂込資本金	純益金	收益率	配當金	配當率	社内保留額	保留率
磐城炭礦	二七、五〇〇、〇〇〇圓	一七、一八七、五〇〇圓	三五、一八七、五〇〇円	一、九四四、六九円	一五・七%	五六〇、〇〇〇円	四・四%	一、六八八、六九円	八六%
松尾鑛業	一〇、〇〇〇、〇〇〇	九、〇〇〇、〇〇〇	二六、一八七、五〇〇	一、〇三九、八三三	七・九	五八三、三九七	四・五	三九八、四三六	三八

十六年下期
十七年上期

調査會社の拂込資本金は松尾鑛業の增徵により前期に比し一、〇〇〇、〇〇〇圓（四%）を增加したが、收支比率は七八%より八八%に惡化し、回轉率は前期と同率の對固定資產（〇・四五）を除き、對拂込資本（〇・七一より〇・六八）、對使用總資本（〇・三四より〇・三一）は夫々低下した。

純益金は前期に比し九三四、八二六圓（四七%）を激減し、從つて收益率は對拂込資本（一五・七%より七・九%）、對株主資本（一一・三%より五・六%）、對使用總資本（七・五%より三・六%）の各項目に亘り著しく低下した。利益處分に於ては配當率が四・四%より四・五%に上昇したのに對し、保留率は八六%より三八%に急落した。

(九) 商業

調査會社	公稱資本金	拂込資本金
仙臺青果市場	五〇〇、〇〇〇圓	一二五、〇〇〇圓
鹽釜魚市場	二、七〇〇、〇〇〇	二、〇四七、五〇〇

青森青果	一五〇、〇〇〇				七五、〇〇〇	
仙臺魚市場	五〇〇、〇〇〇				一九七、二二五	

備考　調査會社の變更―仙臺魚市場一社加入。

	拂込資本金	純益金	收益率	配當金	配當率	社内保留額	保留率
十六年、下期	三、三四、五〇〇円	九九、〇四円	八八%	六三、一五円	五六%	三、七〇九円	三%
十七年上期	三、四四、七五五	八九、二四四	七・三	六六、六二〇	五五	一八、四〇四	三

調査會社の拂込資本金は仙臺魚市場の加入により前期に比し一九七、二二五圓（八・八%）を增加し、收支比率は前期と同率の七三%を示したが、回轉率は對固定資産（〇・三〇より〇・三一）の上昇を除き、對拂込資本（〇・三三より〇・二七）對使用總資本（〇・二四より〇・二〇）は夫々輕微ながら低下した。純益金は前期に比し九、八四〇圓（九・九%）を減少し、收益率は對拂込資本（八・八%より七・三%）、對株主資本（八・二%より六・七%）、對使用總資本（六・五%より五・四%）の各項目に亘り低下した。利益處分に於ては配當率が五・六%より五・五%に低下すると共に保留率も三三%より二二%に低下した。

東北地方農業の生産諸條件

農林水産科

一、はしがき

我が國が瑞穂の國であり四面環海の食糧豐富な國であり食糧に關する限り不安無きものと考へられ且つ強調せられて來た。歐洲諸國が一旦緩急ある場合には直ちに食糧問題の解決は最も重大なる課題となり全戰局の決定に大きな役割を演ずることは前大戰の例に見ても明らかである。歐洲諸國に比すれば今日に於ても猶我國の食糧問題は大きな強味と云はなければならないけれども昭和十四年の我國西部及び朝鮮の凶作を契機として我國の食糧問題も眞劍に考慮されなければならなくなつた。此の問題の發生が單なる凶作による收穫減であるならば一時的な糊塗策で解決され得て今日の如く決して重大な問題とならなかつたであらう。併し乍ら一例を米穀に取つて見るならば其の原因は種々あるであらうが米穀の需要は昭和十一年八千六百十七萬石であつたものが昭和十二年には九千六百十三萬石、十三年には一億六十四萬石と年々著しく增加して來て居り、其の他農產物も食糧としてのみならず工業原料としても飛躍的增加が要求せられてゐるのである。之に對して農村勞働力は軍隊要員に關する者は除くとしても、軍需產業の急激なる生產力の擴充に動員せられ、又我國產業構造が高度化するにつれて此の動員規模は一層擴大されることは云ふ迄もない。更に又我國農業生產の最も重要なる要素であつた肥料の供給も相當の困難を極めると云つた狀態であることは周知の事實で、其の他の各種農業資材もことごとく窮屈化を免れ得ない狀態である。一方では尨大なる生產擴充が要求

せられ、他方之に對する諸要素は決して餘裕あるものでない現實の事態に於て、最早決して從來通りの生産樣式、生産構造を以てしては現時の要請に應じ得られるものではなく、之が革新は當然の事にして既に數多くの此の種理論を見るのである。

之等の理論が東北地方農業に如何に適用されるであらうか。之が本稿の終局の目的ではあるが、我々は其の前に東北地方農業が現在如何なる狀態にあるかを解明しなければならない。東北地方の農業には其の特殊性があり、其の性格を正當に認識された上でなければ如何なる優れた理論も現實に適用され得ないことは云ふ迄もない事である。それ故に先づ我々は第十七次農林省統計表を中心に東北地方農業生産の諸要素について概觀しようとするのである。

東北地方は我國內地總面積の一七・二%を占め我國內地總人口の一〇・〇%（昭和十三年）を占めて居り昭和十二年度此の地方農産物品目別對全國産額比を見ても例へば米に於て一七・〇%、大麥一六・〇%、等々、苹果の八一・〇%[註1]を除くとしても我が國農業生産額中に於て占むる位置は極めて重要にして、而も此の地方農業が他の所謂「府縣農業」と異つて新しい分野を持つてゐることは記憶されなければならぬ。他方東北地方內の農業の地位は其の生産額について見るならば東北地方總生産額の四四・六%、農業人口は總人口の六四・五%[註2]を占めて居り、勿論東北興業會社の設立、更に强力なる推進力としては國防國家體制の完成の要請によつて東北地方産業構造近代化の萠芽は見られてゐるが、尙東北地方の産業の重心が農業にあるのであり東北地方の眞實の振興は農業自身の自立的な發展にも求められなければならない。そして此の事は決して不可能なわけではない。東北地方農業が從來無反省に「府縣農業」の延長となつて居たことに對し、近年「北方農業」の導入が意識的に考慮され始めたのも其の一つの證據であると云ふことが出來る。

註1　東北北方產業經濟統計表
註2　本誌第七號

二、氣　象[註1]

農業生產額の「豐凶原因の九二%が氣象に原因するものと云はれる」[註2]程氣象條件の如何は農業生產額に實に大きな影響を與へるものであるが、特に東北地方は一般に冷害が三年に一回襲來すると云はれて居り、東北地方農業にとつて凶作對策は實に最大の課題で之が技術的對策は各縣農事試驗場の稻、小麥の品種改良が種々行はれて居り、又暗渠排水其他の耕地改良事業も實施せられつゝあるが同時に農業經營自體の改善も考へられなければならない。卽ち之は稻作の危險を畑作及畜產に依つて分散緩和することが必要であるが、茲には詳細に亘る餘裕を有しないが稻作と氣象條件のポシティブな關係を眺めて見よう。

第一表　東北地方米產額

	昭和十二年	昭和十四年
青森縣	一、五三六、六二二	一、六二六、八八一
岩手縣	一、二八二、八四一	一、四〇七、六三五
宮城縣	二、一四一、五五五	二、三七一、二九四
秋田縣	二、二二三、二四六	二、四五七、九四九
山形縣	二、一八三、七八五	二、四一一、三五五
福島縣	二、一六四、〇四〇	二、三六五、四八七

備考　富民協會昭和十六年日本農業年鑑

昭和十四年は第一表に見る如く大豐作の年であるが、此の年の東北各地の平均氣溫を昭和十二年迄の累年平均氣溫に比較して見るならば各地共七月、八月の兩月が高く、此の二ヶ月の他は所により高溫、等溫があるけれども凡ね低溫であつて、一ヶ年間各月が高溫である必要なく稻生育期間の高溫であることが豐作の大きな原因であることが明確に認められるのである（第二表參照）。更に降水量について見るならば昭和十四年が青森に於て全年降水量が僅かに多い他は各地共平均降水量以下であり、而も宮古を除けば平均以下の降水量の月は六月、七月、八月、九月に集中されて居て、先の氣溫と同樣稻生育の期間に降水量の少いことが豐作の必要條件たることが分る（第三表參照）。此の他氣象條件として種々あるであらうが夫等については他の研究に讓ることにするが、以上によつても稻作と氣溫降水量との極めて密接なポジティブな關係を見出すことが出來るのである。併し乍ら氣象條件は全く自然的な現象であつて之を人爲的に左右することは出來ないのであつて、此の樣な關係を究明する事によつて却つて我々は東北地方が如何に大きく自然の脅威にさらされてゐるかを知ることが出來るのであるが今日我國に於ては米作が不可缺のものであり又東北地方自體にとつても此の地方の米作を減少せしめ得ない事は云ふ迄もないことで對寒稻種の栽培、苗代改善、健全稻の育成に農家が努力すると同時に國家的事業として人工的冷害對策施設の完備、農業經營の指導がなされなければならない。かくして稻作を冷害から能ふ限り被害を減少せしむるのであるが、更に積極的に畑作及飼畜を行ふことに依つて冷害を分散し、東北地方農村自體の經濟力を增强することが何よりも根本的な冷害對策であると云ふことが出來る。米作の冷害が收穫皆無の場合さへあるのに對し、畑作に於ては四割以上の收穫減は無いと云はれ、又米作が殆んど一毛作であるのに對し、畑作は土地利用の困難な東北地方に於ても適當なる作物の組合せにより二年三作以上は容易に期待され得るのである。東北地方の根本的なる冷害對策は實に田、畑の綜合的なる經營にあると云ふこと

が出來るのであつて、此の事は同時に勞力問題、肥料問題との關聯に於ても推進されなければならない基本方針であるが今は之以上述べる餘裕がない。

註1　本項には本誌第二號二十頁以下參照
註2　富民協會昭和十六年日本農業年鑑

第二表　昭和十二年迄累年平均氣溫、昭和十四年平均氣溫比較（攝氏度）

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
山形	(−)一・七	(−)一・二	二・〇	八・九	一四・三	一九・〇	二三・〇	二四・一	一九・四	一三・五	六・五	一・一
	(−)一・七	(−)一・三	一・八	八・七	一四・三	一九・〇	二三・三	二四・三	一九・三	一三・五	六・五	〇・八
石巻	(−)〇・四	〇・二	三・〇	八・七	一三・二	一七・二	二一・三	二三・三	一九・八	一三・七	七・九	二・四
	(−)〇・五	〇・一	二・九	八・六	一三・〇	一七・一	二一・四	二三・五	一九・七	一三・八	七・九	二・一
宮古	(−)〇・七	(−)〇・三	二・五	八・二	一三・三	一六・〇	二〇・二	二三・二	一八・五	一二・七	七・三	二・一
	(−)〇・八	(−)〇・四	二・四	八・二	一三・三	一六・〇	二〇・四	二三・四	一八・五	一二・七	七・三	一・九
秋田	(−)一・五	(−)一・三	一・九	八・三	一三・二	一八・〇	二三・二	二三・八	一九・二	一二・七	六・九	一・三
	(−)一・六	(−)一・三	一・七	八・一	一三・二	一八・一	二三・五	二四・一	一九・一	一二・八	六・九	一・一
青森	(−)二・七	(−)二・二	〇・六	六・九	一二・八	一六・三	二〇・八	二三・八	一八・五	一二・一	五・九	〇・一
	(−)二・六	(−)二・二	〇・五	六・八	一二・八	一六・三	二〇・九	二三・九	一八・五	一二・一	五・九	(−)〇・一

備考　前者が昭和十二年度迄累年平均氣溫本誌第二號
後者が昭和十四年平均氣溫、富民協會昭和十六年日本農業年鑑

第三表　昭和十二年迄累年平均、昭和十四年降水量比較（單位粍）

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
山形	九四・五	七四・五	七四・七	七三・七	八一・七	九九・七	一三六・六	一四三・二	一四三・一	九八・六	八七・三	一、二六・八	一、三三五・四
	九九	八〇	七九	八〇	八三	九九	一三一	一四八	一三八	一〇五	八八	一一七	一、二四六
石巻	四一・八	五一・二	七四・五	九六・七	三三・七	二三三・二	二四七・九	一三〇	一六四・八	一三八・六	六七・五	四三・八	一、一三九・六
	四三	五五	七五	九八	一一六	一一五	一一四	一一三	一五八	一三〇	七一	四〇	一、一二七
宮古	六四・九	七一・二	八二・九	九九・六	一一〇・三	二一〇・二	二三七・三	一六五・一	二二九・三	二五八・二	八〇・六	五九・五	一、二六〇・二
	六三	八〇	八一	九七	一〇三	一一三	一一三	一七三	二一二	一五一	七九	五〇	一、一三三
秋田	一三〇・四	一〇二・六	一〇六・一	一二六・三	一〇九・八	一二九・六	一八九・五	一九一・二	一九四・五	一七五・五	一八九・五	一六五・三	一、八〇〇・三
	一四一	一〇八	一〇六	一二六	一一三	一二六	一七九	一八四	一九八	一八一	一九七	一五六	一、七九二
青森	一四四・三	一〇八・一	八五・三	六六・二	七〇・九	八一・〇	一三三・一	一二八・九	一三九・五	一二六・七	一四一・八	一六一・八	一、二六七・六
	一五四	一一〇	八九	六九	七三	八〇	一二六	一一一	一三五	一三一	一五一	一六二	一、二八〇

備考　前者が昭和十二年迄の累年平均降水量本誌第二號後者が昭和十四年降水量富民協會昭和十六年日本農業年鑑

三、土　地

註一

耕地が農業に於て最も重要なる要素であることは今更云ふ迄もないことであるが、其の耕地には一定經濟段階に於ては所謂「收穫遞減の法則」なるものが存在し、他方我國の耕地面積が狹少なることは之又周知の事實であつて之が劃期的變革なくしては今日の食糧問題のみをも解決することは困難である。「東北地方の農業は日本の農業であり東亞の農業である」とさへ云はれる東北地方の耕地は如何樣なるものであらうか。我國農家の經營耕地面積が北海道を除けば大體九反歩餘であるのに對して東北地方の夫が一町四反歩近くであり、比較的一戸當耕地面積は大であると云ふことが出來、その內容は次項に於て見る所であるが、此の樣な耕地自體と之に關聯する土地狀況は東北地方に於て如

何なるものであらうか。

第四表　東北地方耕地面積

	田		畑		計	
青森	七三、〇五六・八町	五三・一%	六四、三七三・二町	四六・九%	一三七、四二〇・〇町	一〇〇・〇%
岩手	六八、三〇九・六	四四・四	七八、八二九・八	五三・六	一四七、一三九・四	一〇〇・〇
宮城	一〇三、四三一・八	六九・七	四五、〇一一・四	三〇・三	一四八、六三三・二	一〇〇・〇
秋田	一二五、四三七・七	八〇・三	二八、五六一・五	一九・七	一四三、九九九・二	一〇〇・〇
山形	一〇一、六一六・二	七一・一	四一、〇三〇・六	二八・九	一四三、六三六・八	一〇〇・〇
福島	一〇四、七五七・一	五四・一	八八、五九九・三	四五・九	一九三、三三六・四	一〇〇・〇
東北計	五六八、六二九・二	六三・一	三四六、五四五・八	三六・九	九一三、一七五、〇	一〇〇・〇

備考　第十七次農林省統計表

我國内地總面積の一七・二%を占める東北地方は耕地面積では一五・〇%を占めて後に見る如く山林、原野として多く放置せられて農耕地としては比較的未利用狀態にあるのである。總耕地面積を田畑別に見るならば岩手縣を除いては各縣共田地が多い。就中秋田、山形兩縣の田地比率は著しく高く秋田縣は絶對的にも田地面積が東北六縣中最大であるけれども山形縣は絶對的には六縣中第四位であるにも拘らず、既に第一表に見た如く此の二縣が東北地方に於て最も主要なる米産縣である。此の二縣が米を主要産物とする點に於て其の農業經營にも他の各縣と異つた性質を有するのであるけれども夫等は追々明らかにされる所である。

農業生産增大の一つの方法が耕地の擴張にあることは云ふ迄もないことであるが、其の實情は東北地方に於ては如何なるものであらうか。

第五表　東北地方耕地擴張及潰廢面積

	擴張			潰廢		
	田	畑	計	田	畑	計
	町	町	町	町	町	町
青森	二七二・六	八七四・六	一、一四七・二	三七三・八	三一八・九	五九二・七
岩手	五六三・四	二八九・五	八五三・九	二一〇・八	二四七・九	四五八・七
宮城	三四・九	一二・一	四四七・〇	七九・一	六五・一	一四四・二
秋田	一七七・一	一一・五	二九〇・六	一二三・六	四二・二	一七七・八
山形	二二・七	二五六・九	四六九・六	一四七・九	七六・九	二二四・八
福島	六六・五	四一五・二	一、〇八一・七	一四四・一	三三三・八	四六六・九
東北計	二、三九・二	二、〇六〇・五	四、二八九・〇	一、〇六九・三	九八五・八	二、〇五五・一

備考　第十七次農林省統計表

耕地擴張の中大部分は開墾によるものであつて、秋田の七五町歩の埋立による水田擴張と五七・三町歩の荒地復舊を除けば山形が七一・〇％福島が七八・七％、青森が八四・五％、岩手が八五・三％、宮城が八五・五％迄開墾による耕地擴張である。更に此の耕地擴張の内譯を見るに福島、岩手に於て水田開墾が比較的多く行はれ、畑開墾は青森に非常に多く福島に比較的多い。之を總計について見るならば青森が最も多く一、一四七・二町歩を占め福島が一、〇八一・七町歩以下岩手、山形、宮城の順で秋田は僅かに二九〇・六町歩に過ぎない。

此の樣に耕地擴張が實行されてゐる他方耕地の潰廢も亦避けられない。潰廢面積の多いのは青森の　五九二・七町歩を最高として福島、岩手が相當多い。之を耕地擴張面積と對比して見る時東北全體に於て擴張面積の四七・八％が潰廢してゐるのである。此の比率は秋田の五四・二％を最大として岩手(五三・八％)、山形(四七・九％)、福島(四一・一％)

宮城（三二・三％）、青森（三一・三％）の順となつて居り、一方で新しい資本を投じ乍ら他方に於て其の半ば近くが潰廢に歸しつゝあることは注目されなければならない。此の潰廢の理由としては宅地、工場建物の敷地となるもの、道路、鐵道、軌道、河川及水路敷地となるもの等近代的施設の爲に潰廢せしめられるものも相當多く、宅地、工場敷地の爲に潰廢した比率は福島が縣下潰廢面積の五五・五％に及び以下宮城（三八・七％）、青森（二八・二％）、岩手（二七・二％）、秋田（一七・一％）、山形（一二・七％）の順となり東北全體に於ては三二・五％であつて全國の比率が三〇・六％であるのに比較する時東北地方の工業化が稍高い事が知られるが、併し此の事は從來東北地方が他地方に甚だしく後れてゐた事を示すものであり、又前掲諸數字によつて知られる如く、工業化の狀況も福島、宮城に集中的に示されてゐると見る事が出來る。次に道路、河川等の爲に潰廢せしめられた比率は秋田が三五・三％を占めて最高であつて、岩手（一六・三％）、山形（一二・七％）、宮城（一二・六％）、福島（一二・四％）と續き青森が遙かに下つて六・三％となつて東北全體に於ては一三・四％となり全國の一〇・四％に比すれば可成り高率と云ふ事が出來よう。

以上の樣に潰廢地の中生産的に潰廢に歸せしめられるものもあるが、我々は不生産的な荒地として相當比率が占めてゐることに注目しなければならない。一方に於て巨費を投じて未知、未熟なる土地を全く新たに開墾し乍ら他方に於て既に長年耕作されて來た土地が荒廢に歸しつゝあるのは矢張り相當の理由あることは勿論であるが、之が究明なくして徒らに耕地の擴張を以て食糧增産の第一條件の如く考へるのは不當と云はなければならない。東北地方耕地面積潰廢中荒地と化しつゝある狀況は山形縣に於て總潰廢地の六三・二％の高率を示し、以下宮城（三七・九％）、秋田（三六・七％）、の兩縣が比較的多く、青森（二七・一％）、福島（二一・〇％）の順となり岩手が一三・六％と最低であるが各縣共相當程度が荒地となりつゝあるのである。更に此の荒地の內容を見るに東北地方全體に於ては田が總荒地面積の

六〇・六％で畑に比して著しく多く秋田では實に八二・五％であり荒地の大部分が田であると云ふことが出來よう。荒地の總面積は東北地方總計で五八一・八町歩であつて其の絶對數は餘り大きくはないけれども、上述した所に依つて此の僅かなる數値も決して輕視し得ないことが分ると思ふ。そして農家が或る理由で農耕を廢止、或ひは縮少する場合其の多くが田を畑よりヨリ多く縮少しつゝある事實が東北地方米作と他地方の溫暖なる米作地帶との相關々係に於て考察されなければならないと共に、東北地方の田、畑混合經營の必要を示すものと云ふ事が出來よう。

農業生産增大の他の方法は單位耕地面積の生産力の增大である。土地生産力の增大は耕作方法、作物の種類、肥料に依ること大であり之等各要素については後に見る所であるが、土地の自然的條件の人爲的改良も亦見逃し得ない重大な要件である。併し乍ら我國の如き勞働力のみによる極度の集約的な農業に於ては科學的な土地改良は寧ろ無視せられて、人工を加へることなく與へられたまゝの土地條件に豐富なる勞働力を過大に勞費して其の高生産性を保持し發展せしめて來たとさへ云へる。此の樣な農業生産構造が現時に於て根本的に否定せられて來てゐることは周知の事實であつて、新しき農業生産構造が樹立されるに當つて土地條件が整備せられなければならないことも一つの重要な條件であつて、[註2]此の樣な用意が東北地方に於て如何に進められてゐるであらうか。新聞紙上土地の交換分合が次第に進捗して來てゐることが屢々報ぜられてゐるが、[註3]茲では耕地整理の狀況を見ることにする。

第六表　東北地方耕地整理面積

	設立施行認可	工事完了	換地處分	事業終了
青森	二〇、八二一町	七、七五二町	四、七八五町	七五八町
岩手	一七、五一六	三、六九七	三、二六一	九七一

宮城	七五、四四〇	五三、九八六	四七、九八〇	三四、一三四
秋田	四〇、〇二九	二七、四七九	二七、七六八	一五、七三三
山形	四三、八一四	二九、六五三	二七、九四六	二一、四三六
福島	四八、五八四	三一、八二二	三〇、三八八	一七、九八八
東北計	二四六、二〇四	一五四、三八九	一四二、一二八	九二、〇二〇

備考　第十七次農林省統計表

東北地方の耕地整理施行認可面積は二四六、二〇四町歩で全國計の一九・九%を占めてゐる。此の中既に工事完了したものは一五四、三八九町歩で全國計の二一・六%であり、以下換地處分が二二・八%、事業終了が二四・六%となつて居り東北地方耕地整理は比較的進んでゐると云ふことが出來る。併し乍ら之を東北地區内について見るならば各縣の間に甚しき相違があるのである。第六表に見られる如く設立施行認可面積は宮城が東北計の三〇・五%の多きを占めてゐるのに對し、岩手は僅かに七・二%であり青森は八・五%に過ぎない。そして此の間に福島が一九・八%、山形が一七・七%、秋田が一六・三%となつてゐる。而して各縣の工事進行狀況も亦著しき相違があつて工事完了の分をのみ見ても宮城が五三、九八六町歩で設立施行認可面積の七一・五%を完了してゐるのに對して岩手は二一・一%、青森は三七・二%を完了してゐるのみで他は凡ね六六%から六九%を完了してゐる狀態である。其の他換地處分、及び耕地整理の完成段階たる事業終了について見ても宮城、福島に進行して、青森、岩手が著しく後れてゐる事が分る。

最後に農業とは夫自身直接の關係を有しないが農家經濟とは密接な關係を有し、更に耕地擴張に重要なる山林原野がある。

第七表　東北地方林野面積

	總面積	御料	國有	公有	寺社有	私有
青森	六四、五二四・四町	三、一〇一・四町	四二五、四九六・〇町	六五、〇六九・五町	一、〇四五・三町	一三、八〇三・二町
岩手	一、〇七八、九七七・七	四三、六三二・五	四九九、五三〇・二	一三三、二九六・九	一・七五三・五	四七一、七四四・六
宮城	四四三、一〇四・六	—	一三五、九三〇・〇	二九、四〇三・八	二、一〇八・五	一七五、六六二・三
秋田	七六二、五六二・四	—	四一〇、三三一・〇	一六七、〇四三・九	一、五三一・四	一八三、六五六・一
山形	六三二、四四三・一	—	三六八、五一〇・三	一〇三、二二四・六	二、五〇四・二	一五八、二二四・〇
福島	九九七、六二三・一	一、八〇九・九	四七七、五九一・〇	一七〇、六二一・二	三、七三二・八	三六三、八五八・二
東北計	四、五五九、一九五・三	六六、五四三・八	二、二二七、三八八・五	七五七、六四九・九	一二、六七五・七	一、四七四、九三七・四

備考　第十七次農林省統計表

東北地方林野面積は我國總林野面積の一八・九％で相對的に大であると云ふことが出來る。此の内譯を見るに御料面積は〇・二％（全國に於ては五・五％以下同じ）、國有面積は四九・一％（三一・六％）、公有面積一六・八％（一八・七％）、寺社有面積〇・三％（〇・五％）、私有面積三二・五％（四三・七％）であつて全國に比較する時國有面積が東北地方に於て著しく多く、從つて私有面積が著しく狹少であることが特徴である。

東北地方内に於ては岩手が東北總面積の二三・六％を占めて最高であり、以下福島（二二・九％）、秋田（一六・七％）山形（一三・八％）、青森（一二・三％）、宮城（九・七％）となつてゐる。又各縣内の私有林野面積の割合は岩手が四三・六％で全國平均に近付いてゐる他は小さく青森の如きは僅かに一九・四％に過ぎない狀態である。

以上の如く、東北地方の耕地面積は相對的に狹少であり、林野面積は廣大でありそれだけに東北地方は耕地擴張の餘地が大きいのである。而して年々之が開墾も進められてゐるのであるがこゝに適正なる近代化されたる自作農を創設し之が健全なる發達を圖ることは云はば不當なる發達に困窮して來た東北地方農業の現狀を打破して新しき出發を

なす原動力となることになるのである。

註1　本項には木下氏「東北農業構造の特殊性」參照

註2　土地問題は農業の資本構成の高度化によつて解解されるとの說もある。我妻東策氏著「農業近代化の理論」

註3　例へは昭和十七年十二月十日日本產業經濟新聞其他

四、農　家

農家の分析には極めて多方面があり、其の綜合的判斷は到底此の小論のなし得る所ではなく單に資料の提供の意味に於て土地と關聯せしめた農家について概觀するに止める。

東北地方は一つには其の自然的制約に依つて土地の高度利用が困難なる事によつて他地方よりもヨリ廣き耕地面積を必要とすること、二つには此の地方は他地方程他產業が興隆せず從つて兼業農家として存續することの困難なること、此の二點よりしても東北地方農家の經營耕地面積が他地方よりもヨリ廣いことを必要とするのであるが此の點如何なるものであらうか。

第八表　東北地方耕地廣狹別農家戶數

	五段未滿	五段—一町	一町—二町	二町—三町	三町—五町	五町以上
青森	二六、五一九戶	三三、六九七戶	二四、六九六戶	一三、一八六戶	五、二六七戶	八七二戶
岩手	三一、六八五	三一、九〇八	三三、六二九	一〇、八五八	四、〇一三	五五八
宮城	三〇、九三〇	二七、八九八	二八、七六〇	一二、三〇六	五、一八七	一、二四九
秋田	二四、〇四〇	二四、〇九三	三〇、九六四	一三、四〇一	四、六一八	三三
山形	二八、六四〇	二五、六五五	三〇、九〇八	一三、〇〇八	六、一三六	八六

福島	三四、三四	三七、六八九	四四、六四四	二六、八〇八	五、〇三二
東北計	一七六、四九九	一七〇、九五〇	一九五、六三一	七八、五六七	三〇、二四三

備考　第十七次農林省統計表

東北地方農家の中耕地面積五段―一町のものは二六・九％（全國平均は三三・五％以下同じ）、一町―二町のものが二六・一％（三二・九％）であつて全國のそれに比すれば遙かに低率であり二町歩以上五町歩迄の各群に於て相當程度比率が高く東北地方が一般に廣い耕地面積を有すると云はれる所以であるけれども、東北地方が從來社會的經濟的な力に依つて「府縣農業」に終始して寒地農業に關する研究を全く缺いて來てゐるが故に此の樣に云はれるのであつて、所謂冷害を克服して自立する東北農村確立の爲に北方農業が或る程度採用されなければならない今日、東北地方の現耕地面積は決して相對的には廣大であると云ふ事は出來ない。試みに東北地方農家の適正規模が常識的に三町歩であると云はれ北海道の農家一戸當耕地面積平均が四・九町歩であるのに比すれば、二毛作田の殆んど存在しない東北地方では農業のみでは恐らくは單純再生產も不可能な貧窮零細農家[註2]が八〇％以上を占めてゐると云ふ事が出來よう。併し乍ら東北地方の一戸當耕地面積が幾分でも廣いことは、更に一段と此の耕地を集約的に經營する經濟的可能性の一つの契機であらねばならない。[註1]

此の樣に他の「府縣農業」に比較すれば幾分は廣い耕地面積を有するけれども大部分が矢張り健全なる自立せる農家と云ひ得ない東北地方農家を專業兼業別、自小作別に見る時は如何なるものであらうか。

第九表　東北地方農家戸數

	總數	專業	兼業	自作	小作	自作兼小作
青森	四、三六	六五、九八戸	二八、三七八戸	三六、四七〇戸	三三、三五四戸	三五、三九二戸

岩手	一三、六五一	八六、三九	二六、三三	四三、五六八	二四、八四七	四五、二四六	
宮城	一〇六、四三〇	八二、五九三	三三、八三七	二〇、八二七	四三、二〇一	四三、四〇三	
秋田	九七、四七九	六〇、八三九	三六、六四〇	一八、一三五	三五、九九三	四三、三六三	
山形	一〇四、三二五	六八、九九三	三五、〇三三	三三、〇〇九	三六、〇三三	四六、一五三	
福島	一四〇、九九六	一二三、〇七〇	二八、九三六	四三、四五五	四〇、一三八	五八、四〇三	
東北計	六五六、〇〇七	四五六、七八二	一九、三五	一七三、四四四	二三、六〇五	二七〇、九五八	

備考　第十七次農林省統計表

「東北は專業增、兼業減で兩者を合せた總數が殖えたり減つたりの不定」[註3]と云はれる東北地方農業總戸數は全國農業總戸數の一二・〇%の六五六、〇〇七戸で其の中專業農家は七二・五%を占め全國のそれが六八・九%であるのに比較すると東北地方の農家の專業率の高い事が分るが此の事は自小作別戸數と合せて考慮されなければならない。猶其の前に各縣別に專業農家數率を見れば福島（七九・五%）宮城（七七・六%）、岩手（七六・六%）、青森（六九・九%）、山形（六六・〇%）、秋田（六二・四%）の順となつてゐる。次に自作、小作、自作兼小作別について見るならば、東北地方の夫等の百分比は自作二六・三%（全國は三一・〇%以下同じ）、小作三二・四%（二六・八%）、自作兼小作四一・三%（四二・二%）であつて東北地方に於ては小作戸數率が著しく高い事が注目される。之を各縣別に見るならば小作戸數率の最も高いのは宮城縣の四〇・五%であつて以下秋田三七・〇%、山形三四・六%、青森三四・四%、福島二八・五%、岩手二二・一%の順であり全國の小作戸數率より低いのは僅かに岩手縣一縣のみと云ふ狀態で、相對的に狹い耕地を兼業することも少く冷害におびやかされつゝ殆んど自己の勞力に依つて經營してゐるのが東北地方農業の現狀である。「國內食糧自給强化のため生產性高き適性規模農家を設定、從來の自作農維持創設運動を一段と强化するとともも

に生産技術の改善、經營の共同化、機械化をはかること」と云ふ全く正しい農林省の國本農村建設の方針に對して此の地方の現狀は尙餘りにも程遠いと云はなければならない。小作農家が自作農家より生産條件劣り、從つて當然小作農の生産力が自作農に及ばないことは周知の事實であり、又大規模經營農家が同一地域に於て勞働生産性は勿論反當收量に於ても小規模經營農家に優つてゐることは多くの實例が示す所であつて單に食糧增産の見地のみからしても適正規模なる自作農を創設し維持して行くことが必要であるのみならず、「人口政策的見地から農村をして健兵健民の培養地たらしむべく農業報國精神の徹底」を期する最も捷徑であると云はなければならない。東北地方が其の農家の八〇％以上が二町歩以下の相對的な零細農であり、岩手の自作農率三七・九％を除いては各縣とも全國平均より以下であり宮城、秋田の如く一九％前後の甚だしく低率なる自作農の狀況であつて見れば東北地方の農業が日本の農業であると云ふ言葉も東北地方農業の生産量の面からのみ解さるべきではなく、此の地方の農業が甚だしく多くの問題を含んでゐると云ふ面からも解されなければならない。

註1　本誌創刊號、及社會政策時報第百七十號號宮本氏稿
註2　本誌第四號
註3　社會政策時報第二百六十三號宮本氏稿

五、肥　料

食糧不安に當面した事の無かつた我國に於ては明治の初期は暫く措き農業政策が全く農村救濟の政策に終始したと云ひ得べく豐富低廉なる農村勞働力は後進日本の工業を長足に發展せしめたのであるが猶農村自體に於て此の豐富な

る勞働力を如何に消化するかに苦しんだのであつた。そして我國農業は其の生産構造の變革の遑なく餘剩勞働力の投下と肥料の增投とに依つて日露戰爭以後の顯著なる增産を成し遂げげて來たのである。極度に零細化される耕地に對して農民は生産構造の改善の必要もなく資本の回轉の速やかなそして又分割の容易な肥料を年々收穫遞減の法則を經驗し乍らも增投し續けて來たのである。此の樣な增産方式が現時に於ては許されずヨリ根本的な生産構造の變革に於て始めて當面せる食糧增産の要請に良く應じ得るものではあるけれども、農業に於て肥料が如何に重要なる生産要素であるかは今更云ふ迄もないことである。此の肥料が東北地方に於て如何に消費されて來てゐるであらうか。

第十表　東北地方肥料消費額　（昭和十三年）

	販賣肥料消費額	自給肥料消費額	反當消費額 販賣肥料	反當消費額 自給肥料	一戸當消費額 販賣肥料	一戸當消費額 自給肥料
	千円	千円	円	円	円	円
青森	五、八七〇	一八、六八〇	四・三三	一三・七三	六〇・八六	一九三・六八
岩手	五、五〇〇	八、三〇〇	三・七六	四・六八	五〇・四三	七六・〇九
宮城	七、三三〇	一一、三四〇	四・九九	七・七三	六九・九一	一〇八・三一
秋田	三、六九〇	一〇、二八〇	二・五七	七・一六	三六・八八	一〇三・七四
山形	九、五一〇	八、九七〇	六・六八	六・三〇	八八・一一	八三・一一
福島	九、九八〇	一一、四七〇	五・一九	五・九七	六六・九五	八一・三六
全國計	四五〇、四三〇	四一、五三〇	七・四一	七・二六	八二・七八	八一・一五

備考　富民協會、昭十六年日本農業年鑑

販賣肥料、自給肥料を合計した反當消費額に於て全國平均以上の縣は僅かに青森一縣のみであつて岩手、秋田に至つては全國平均を距ること甚だ遠く十圓以下でさへある。更に販賣肥料について見るならば山形が全國平均の夫に僅

かに近付いてゐる以外は非常に少く秋田の如きは實に三分の一に過ぎないと云ふ狀態である。之に對して自給肥料は
と云ふに青森が全國第一の消費額を示すと云ふ此の年だけの異例の他は宮城が全國平均を稍上廻つてゐるのみで他は
矢張り全國平均に及ばない狀態である。他方一戸當肥料消費額を見るに販賣肥料では全國平均以上を示す他は各縣共
少く、秋田は全國平均の半分以下の三六圓八八錢に過ぎないのである。自給肥料は之に反して岩手が全國平均以下で
あるのを除けば各縣共多く宮城、秋田は百圓以上であり、青森は實に二百圓に近いのである。此の兩者を合せた一戸
當肥料消費額は青森の異例を除けば宮城と山形が全國平均を稍上廻つてゐるのみで他の三縣は相當僅少であると云ふ
ことが出來る。斯樣に少い肥料消費を以て例へば東北地方の此の年の米反當生產高は全國平均以上であるが、此の關
係は改めて研究しなければならない。現今の販賣肥料の增配が殆んど不可能な事態に於て、肥料は一段と自給化され
なければならないのであつて、此の點は作物種類も併せて考慮されなければならないけれども夫以上に家畜から得ら
れる厩肥に依存しなければならないのであつて、牛一頭から二千貫乃至二千五百貫、馬一頭から千二百貫程の厩肥が
得られることは今日に於て最も大きなる肥料源と云はなければならず、此の面からも家畜の必要は考へられるのであ
る。

六、農業用機械

零細なる耕地面積に能ふ限り多くの肥料と人力を投下する事に依つて世界に誇るべき高土地生產性を維持して來た
のであるが、勞働力の生產力は決して優れたものでなく、米國の農家一戸の支え得る戸數が十一戸餘であるのと比較
して日本の農家一戸の支へ得る戸數が僅かに二・四戸餘で如何に貧弱なものであるかはよく引用される所である。此の

事は直ちに我國勞働力の責に歸せられむべきでないことは云ふ迄もない事であるが、今日の如く農業勞働力の不足が深刻化し、而も猶我國の新經濟體制確立の進展に伴つて一層農業勞働力が他産業勞働力として供出されなければならない。現實に於て農業勞働生産力が急速に增强されなければならない農業勞働生産力の增强とは卽ち農業に於ける資本構成を高度化することであつて、所謂農業の機械化でなければならない。此の樣な我國農業に對する强い要請に對して東北地方は如何なる準備をなしてゐるであらうか。

第十一表　東北地方農業用原動機普及數量

	電動機	石油發動機	水力原動機	畜力機	其他共合計
青森	四六八臺	二、〇〇三臺	四七六臺	二九臺	二、九七六臺
岩手	五二六	一、三一四	二、六〇八	五六	四、五〇四
宮城	八二〇	一、三五四	二九八	三二	二、五〇四
秋田	一、九五三	一、七一〇	三三四	一三	四、〇一〇
山形	二、九五八	一、一〇六	六四〇	一七	四、七一一
福島	五九〇	一、六八九	五三八	三一	二、八四八
東北計	七、三一五	九、一七六	四、八九四	一七八	二一、五五三

備考　富民協會、昭和十六年日本農業年鑑

第十二表　東北地方原動機一臺當農家戸數及田面積

	農家戸數	田畑積
青森	三〇戸	二八・一町
岩手	四七	三三・九

宮城	四三	四四・七	
秋田	二五	二九・三	
山形	二三	二三・三	
福島	六〇	四四・五	
全國平均	一六	一〇・三	

備考　富民協會、昭和十六年日本農業年鑑

農業用機械としては其用途に從つて各種類のものが存在するが茲では其の主なるものについて見ることゝする。農業用機械も他産業の機械體系と同樣、原動機配力機、作業機に大別出來ると思はれるが、比較的單純な之等の機械は却つて原動機と作業機に大別するのが明瞭である樣である。而して農業の機械化が强調されるのは第一に原動機に關してであるが東北地方の原動機の內容を見るに第十一表の如く全國の場合と同樣石油發動機が最も多く全原動機の四二・五%を占め、以下電動機の三四・〇%、水力原動機二二・七%、畜力機は僅かに〇・八%と云ふ順になつて居り東北地方が後に見る如く馬産地ではあるが夫等は此の地方の氣候の影響もあつて使役期間は比較的短かく從つて農業との關聯も比較的少くヨリ以上に馬産の爲の馬産となつてゐる如くである。全國畜力機が原動機中に占むる割合一一・四%であるのに比較して東北地方の畜力が現在以上に農業と密接なる關聯を持つことが必要である。更に之を別な面から見れば各原動機共東北地方が全國に比し甚だしく僅少であるけれども殊に畜力機は全國に對する東北地方比率僅かに二・一%であつて東北地方が全國に於て占むる位置が如何に貧弱であるかが知られる。斯樣に東北地方使用の原動機は貧弱であるが更に各縣別に見るならば山形の二一・九%を最高とし宮城の一一・五%を最低とし各縣の間に甚しき懸隔は見られないけれども山形、秋田の農業縣にヨリ進んでゐるのを見ることが出來る。之等原動機の中各縣共電動機、

石油發動機は岩手を除いては八〇%乃至九一%を占めるのであつて、東北地方の如く農村電化の不充分な地方、又最近の石油入手難の折に農業機械化に今猶危惧の念を懷き議論の餘地ある所である。そして畜力機の如きは宮城の一・三を最大として秋田、山形では僅かに〇・三%であつて、之が活用は最も速やかに考慮されなければならない。斯樣に東北地方の原動機の絶對豪數は實に貧弱なものであるが、之を農家戸數と田面積について見るならば第十二表に見られる如く茲に於ても亦東北地方が如何に貧弱であるかが知られる。「現在東北地方に於て最も農業生産力が高度化してゐる山形縣庄内地方の如きは技術的に現段階の科學的な技術の上では殆んど極點に達してゐるのであつて、品種改良や土地改良の餘地は殆んどないといはれてゐると」[註2]云はれる山形縣も縣全體としては全國平均に及ばざる事甚だしく、若し假りに山形縣が東北地方に於て農業生産力の限度に近付いてゐるとするならば、機械の面から見た場合此の山形に近付いてゐるものに秋田、青森があるが、其の他の各縣は之を去ること甚だ遠いと云はねばならない。

次に農業用作業機の若干について見る。

第十三表　東北地方農業用調整機普及豪數

	脱穀機	刈揃機	麥揃機
青森	四二三	二八二	一八
岩手	一、七六八	一、五八三	—
宮城	一、四九二	一、四一四	一一九
秋田	二、三九六	三、五六四	三八
山形	三、三二九	三、九二六	一〇
福島	二、五六五	一、二六五	二九六

東北計	一一、九七三	一二、〇三四	四八一

備考　富民協會昭和十六年日本農年鑑

籾摺機が全國の九・一%を占めて比較的多いけれども脱穀機が五・七%麥摺機は三・七%、であり　先に原動機について見たと同樣東北地方の此の種の諸機械の貧弱さが見られる。之を各縣別に見るならば脱穀機、籾摺機に於ては山形が第一位を占め（東北計中の脱穀機二七・三%、籾摺機三二・七%）、秋田之に次ぎ（二〇・〇%、三〇・〇%）此の二縣が約半數であつて、米産縣の特徴が表れてゐる。此の二縣の他には福島の脱穀機が二一・〇%で稍多いのが見られる。麥摺機では福島が六一・一%を占めて壓倒的であり、之に次いで宮城が二四・七%占めて、其の他は全く云ふに足りない狀態である。次に農耕に直接關係する耕耘機、噴霧機について見るに第十四表に見られる如く、噴霧器が全國の四三・九%を占めて注目されるけれども、併し其の大部分卽ち東北地方計の七三・八%迄は青森にあつて、之は主として林檎の殺蟲に用ひると云ふ特殊事情に基くものであり、此の青森を除けば福島の噴霧器が比較的注目される。耕耘機は東北地方は全國の九・五%を占めるのみであるが、其の大部分が秋田に集中してゐることも注目されて良い。

第十四表　耕耘機噴霧器普及臺數

	耕耘機	噴霧機
青森	五一	一、四九八
岩手	五	一二
宮城	三	—
秋田	一八九	五三
山形	—	四二
福島	一九	四二三
東北計	二六七	二、〇二八

備考　富民協會　昭和十六年日本農業年鑑

次に東北地方の冷害にも或る程度之に對應する技術的設備を缺いてゐると云ふことが考へられる。其の一例として揚排水機を見るに渦卷ポンプが全國の四・六%、縱型ポシプが二・一%に過ぎないのであり、而も其の大部分が青森に

集中して居り、福島の渦巻ポンプが多いのを除けば他の諸縣は極めて小數であつて、此の樣に貧弱なる設備しか有しない此の地方が、田植が一日早いか否かに依て冷害の度を著るしく異にするのであつて見れば、此の種機械の完備の必要も容易に察することが出來よう。

第十五表　東北地方ポンプ普及臺數

	渦巻ポンプ	縱型ポンプ
青森	四二五	四六九
岩手	一六二	一八
宮城	二一六	一九〇
秋田	六二七	九六
山形	九四	一七七
福島	三九	一一四
東北計	一、五六三	一、〇六四

備考　富民協會　昭和十六年日本農業年鑑

以上農業用機械の原動機と作業機の若干について見たけれども青森の噴霧器を除けば何れの機械も實に貧弱であると云はなければならない。原動力としての機械と馬との比較は次項に於て見る所であるが、最多數を占めてゐた電動機、石油發動機が其の動力源としての電氣、石油の入手難を以て直ちに農業機械化の全體を否定するが如き議論は不當にして、東北地方自體に於て既に農業の機械化が必要にして恐らくは農業生産增大の唯一の手段であることは農業者自身に依つて語られてゐる所であつて若し、[註3] 原動機の使用が現狀に於て不可能であるならば作業機の活用も當然考慮されなければならない。云ふ迄もなく機械體系に於ては原動機と作業機は全く個々獨立したものではなく有機的連關を有し原動機を考へない作業機のみを考慮することは出來ないのであるけれども、農業に於けるが如き未だ充分なる機械體系を有しない單純なる機械にあつては作業部門の機械化が先づ考へられても差支へない。加之東北地方には豐富なる馬が存在し牛の增殖が考へられるのであるから之を動力源とする機械體系が愼重に考慮されて良い筈である。そして此の樣な大家畜の飼養は單に動力源の觀點からのみならず農家經濟の面からも、肥料の面からも併せて食糧政策の面からも深い省察を必要とするのである。之等の點

は本稿の目的とする所でないから注意を喚起するに止めるが、大家畜の飼養が決して不當な要求でないことは結論し得るであらう。

註1　此の項荒又操氏著「北海道農業の動向」第一章參照
註2　本誌創刊號
註3　例へば秋田魁新聞昭和十七年十一月十九日

七、家畜

家畜の中には例へば農家經濟及び食糧政策の上から重要なる豚あり東北地方として注目すべき緬羊あり、又家畜とは云ひ得ないけれども農家經濟に至大の影響ある養蠶もあるけれども茲では農耕に關係ある牛、馬のみについて見ることゝする。馬産地東北の牛、馬の現況は如何なるものであらうか。

第十六表　東北地方牛飼養頭數

	總數	牝	牡	農家戸數	飼養戸數
	頭	頭	頭	戸	戸
青森	一九、一二七	二、九八二	七、一四五	九四、二三六	一〇、三六二
岩手	二四、七二〇	一六、七五一	七、九六九	一二三、六五一	一三、七〇九
宮城	三三、五三七	一七、〇六八	五、四六九	一〇六、四三〇	一九、三四七
秋田	一〇、三五五	八、二四六	三、〇八九	九七、四七九	七、五三三
山形	三一、六七一	三三、二八九	八、三八二	一〇四、二二五	二七、一四六
福島	二一、一九六	一六、二四一	四、八五五	一四〇、九九六	一七、七一七
東北計	一二九、五八六	九三、六七七	三五、九〇九	六五六、〇〇七	九四、八〇三

備考　第十七次農林省統計表

先づ牛について見るに東北地方は飼養戸數は全國飼養戸數の五・二%を占むるに過ぎず此の地方に於ては猶相當飼養の餘地あるものゝ如く考へられるが之は別の課題である。此の地方の飼養總頭數は六・三%であつて一戸當飼養頭數は全國平均一・三頭より稍多く一・四頭であるが。之を縣別に見るならば岩手の一戸當一・九頭を最高として青森が一・八頭で他の諸縣は大體全國平均以下と云ふ狀態で、東北地方の有畜農業化の觀點よりする場合、牛に關する限り今猶程遠いものと云ふことが出來る。牝・牡の別について見るならば牝が此の地方では七二・三%であるのに對して全國平均では七六・〇%であり此の地方に近來酪農形態の必要が說かれ始めた事から考へても此の地方の牛飼頭數の增加が考へられる。之を又別の觀點から見るに、牛飼養の家が大體農家であるとして農家總戸數の中牛飼養戸數は山形が二六・〇%で全國の夫（二九・五%）に若干近付いてゐる他は著るしく低位で東北全體では僅かに一四・四%に過ぎないのである。農業に於て馬は父であり牛は母であると云はれるが、此の牛が東北地方に於て斯樣に小數であるのは此の地方が寧ろ馬に關心を持ち、又農業と家畜とを全く別個のものと考へて來た事情に依るものであつて、現時に於て此の兩者のより强い結合の必要であることは屢々述べて來た所である。

東北地方は普通に馬產地と云はれるが、其の實際及び內容は如何なるものであらうか。そして此の馬と農耕との關係は如何なるものであらうか。馬の統計表は旣に早くより其の發表が禁止されて來てゐるので、本稿に於て取扱つた諸統計が昭和十四、五年を主としたのに對し馬は昭和十一年を最新とし、之を中心に分析しよう。東北地方馬飼養總數は三五七、二六五頭で全國總數の二四・八%を占めて所謂東北地方が馬產地であると云ふ常識の一證左となるわけであり、更に牝・牡の別では牝馬が六四・八%であり、全國對比について見るならば牝馬が全國の二八・三%であり牡馬

第十七表　東北地方馬飼養頭數

	總數	牝	牡	農家總戸數	飼養戸數
青森	三、七七〇	三、二九八	一七、四一九	九一、六〇九戸	三、八四五戸
岩手	八四、四一三	五五、四一八	八、九五五	一一〇、六七一	五四、五四六
宮城	五四、四五九	二四、八一七	二九、六四二	一〇六、二五二	四〇、九四九
秋田	五八、七五一	三九、三三〇	一九、五三一	九五、八四五	四八、四六〇
山形	二九、三〇三	九、六二六	一九、六七七	一〇一、四七三	二七、四一五
福島	六六、六三三	六五、七五二	一〇、八七〇	一四一、八五九	六二、四九八
東北計	三七、二六五	三三一、一四一	一二六、一二四	六四七、七〇九	二七四、七一三

備考　第十三次農林省統計表

が二〇・五％であると云ふ點注目されなければならない。併し乍ら一戸當飼養頭數について見ると、全國が一・三頭であるのに對し東北地方は一・四頭にして其の間餘り大なる開きは見られないが此の事は更に次に飼養戸數と關聯する所である。馬飼養の家が總べて農家であるとは限らない。從つて農業戸數と馬飼養戸數との對比を以て直ちに東北地方馬飼養戸數の大を正確には結論し得ないけれども總體的に見て次の諸數字に依り此の地方に馬飼養戸數が多いことを類推することが出來る。即ち全國に於ては馬飼養戸數が農家總戸數の一九・二％なるに對し東北地方は四二・四％を占めてゐる狀態で先の考慮を含めても此の兩數字間の甚しく大きな開きから東北地方の馬が大規模に飼養されてゐるのではなく各農家に分散的に飼養されてゐることが考へられる。次に馬の生產頭數について見るに、東北地方は全國の二四・五％を占めて居り、更に種牡馬について見れば全國の二三・九％を占めてゐると云ふ事實が普通東北地方が馬產地であると云はれてゐることを證明するわけである。所で此の東北地方の內部について見れば著るしく樣相を異にして居り、概括的には此の地方の馬生產が大規模集中的でなく分散的であると云ふことが云へるけれども、其の中に

於ても青森、岩手の一群と、福島、秋田の第二群と、宮城、山形の第三群とに分けることが出來ると思はれる。而して前二群がより以上に馬産的であり、第三群がより農耕と關聯してゐると見ることが出來る。第一群と第二群との間には又別な特徴を有する如くである。東北地方内に於て馬の生産頭數を見れば岩手が二一・六%、福島が二一・四%、秋田が少し下つて一七・〇%であり青森は第五位で一四・五に過ぎない。けれども種牡馬について見れば岩手が三〇・五%で斷然多く之に次いで福島が二四・九%、青森が二三・一%で其の他は云ふに足りない。以上の諸數字を念頭に置て各縣の特質を對比しつゝ概觀して見よう。最初に第一群の岩手と第二群の福島とについて見るに總頭數に於ては岩手が東北地方總數の二三・六%、福島が二一・五%、であり、牡馬頭數では福島が東北計の二八・〇%、岩手が二四・〇%を占めて逆となつてゐることに注目し、次に一戸當飼養頭數を比較するに岩手が一・六頭なるに對し福島が一・二頭であり、飼養戸數では岩手が五四、五四六戸であるのに對して福島は六二、四九八戸である。之等の諸數字を綜合して判斷するに岩手が比較的大規模集中的馬生産であるのに對して福島が小規模分散的生産方法を採用してゐると云ふ著るしい相違點を見出すことが出來ると思ふ。

第十八表東北地方馬生産頭數

	生産頭數	種牡馬
青森	四〇、七八一	二四四
岩手	六一、三九五	三二三
宮城	四六、九五五	八六
秋田	四七、八〇七	一二一
山形	二四、六八五	二〇
福島	六〇、三七三	二六四
東北計	二八一、九九六	一、〇五八

備考　第十三次農林省統計表

青森は頭數に於ては東北地方に占むる地位が概ね秋田以下であるが、其の内容は先に見た如く種牡馬が相對的に極めて重要なる位置を占め、牝馬の縣内總頭數の六七・六%を占めて福島に次いで第二位の大きな比率を占めてゐる。又

青森が一戸當飼養頭數に於て岩手についで一・五頭を以て第二位を占めて居り、之等の諸點から青森が絶對數に於ては東北六縣中に占むる割合は少いけれども其の内容は最も生産的特徴を有すると云ふことが出來る。

次に秋田は馬生産頭數は岩手、福島に次いで第三位で大體に於て福島と同樣の樣相を呈してゐると云つて差支へない。只異る點は種牡馬が東北計の一一・四%を占むるに過ぎず此の比率が極めて小さい點である。

山形は以上の諸縣と最も對蹠的な縣であつて總頭數に於て既に非常に少いけれども、其の内容を見るに牝馬が僅かに縣内總頭數の三二・八%であつて牡馬が壓倒的に多く、而も此の一九、六七七頭の牡馬の中僅かに二〇頭が種牡馬であることより山形の馬が主として農耕用に用ひられてゐるものと考へられる。

普通に青森の南部地方及び岩手が馬の産地であつても馬の使用地ではないと云はれるのは上來述べ來つた諸統計に依つても證明せられるのであつて、東北地方が概括的に馬産地である丈に馬の使用地ではないと云ふことが出來、馬は投機の對象となつてゐると云ふことが出來る。そして此の點は機械の項に若干觸れて置いた所である。

屢々述べて來た如く今日に於ては農業は機械化されなければならないけれど其の原動機の動力源としての電力、石油入手困難である以上所與の條件を最大效率を以て活用することが先づ考へられなければならない。けれども先に見た如く、其の東北地方の現有數が貧弱なものであつて見れば之に代る動力源として畜力の利用こそ眞劍に考へられなければならない。動力源としての畜力は必ずしも電力機に比して劣るものではなく、寧ろ其の使用回數に依ては却つて馬の使用の方が有利であるのであつて、卽ち、「馬一頭當換算使役時間の大なる處に於ては、トラクターの馬に對する競爭力は小であり、使役時間の小なる處ではトラクターは馬に對して其の競爭力が大きい。」註と述べられて居り、東北地方に豐富に存在する馬資源が單に馬産の爲に存することに依て多大の勞力が費されることとなく、却つて逆に馬

に依て現時に於ける勞力不足を緩和して食糧増産に邁進しなければならない。更に家畜は單に動力源として重要であるのみならず肥料自給の爲にも亦極めて重要である。肥料の種類も色々あるが今日の樣に金肥を高價で買入れることは不經濟であり、而も其の肥料すら入手困難である以上、家畜を飼養することに依て糞尿、厩肥を以て金肥に代位させねばならない。耕地に厩肥を施さず、化學肥料のみで年々作物を栽培して居れば地力は消耗して土地生産力は次第に減退するのである。厩肥は單に金肥に代位するのみではなく夫自身が耕地にとつて必要不可缺な肥料であるのである。斯樣に動力源としても肥料生産の上からも重要なる家畜は更に食糧政策、軍馬、農家經濟の面からも其の増産が急速に實現されなければならないのであるけれども之等の點は本論外にわたること故別な研究に俟たなければならない。

註　荒又操氏著「北海道農業の動向」二二頁―二三頁

八、むすび

以上東北地方農業の生産條件の主要なるものを概觀したわけであるが「府縣農業」としての東北地方農業が如何に原始的であり後進的であるかが分つた事と思ふ。而も他方「北方農業」への關心は此の地方に於いては全然省みられず、一度北海道農業と考へ合せて見れば如何に東北地方農業が「北方農業」への基礎條件を缺いてゐるかが分るのである。併し乍ら斯樣な現實は東北地方農業の破滅を意味するものではなくして此の地方の農業指導が誤つてゐた事を示すものであつて、それ丈に此の地方の農業への期待は大きく問題は多いのである。

既に各所に於て述べて來た所を綜合するに東北地方の所謂冷害を根本的に救濟するものは畑作の導入であり、農業生産を飛躍的に増大するものは有畜機械農業の導入であるのである。何時の時代に於ても我國から米を取除くことは

出來ない。米の增產に依つて米に對する不安を取除く事は食糧問題の第一の課題の如くに考へられてゐる。從つて東北地方に對しても米の增產の要求は切實なるものと云はなければならないけれども既に一部から說かれてゐる樣に從來の食糧が我國にとつて唯一の食糧であるわけではなく、我國內に於て產し得る米を最も有效に食用にした上で之に新たなる食糧科學が考究せられることが眞の意味に於ける食糧問題の根本的解決であらねばならない。此の意味に於て東北地方の米の增產も大いに考へられなければならないと同時に當面の食糧對策としても又東北地方にとつて水田以上に畑作が容易である現實に於て畑作の導入は當然である。而も此の事が此の地方の冷害への根本對策の一つでもあるわけである。

農業の機械化の必要は既に論じ盡された所であり今更此處に述べる迄もない事である。只現實の問題として夫等各種機械と動力源の入手難と云ふことである。併し乍ら資材入手難は農業のみにあるわけではなく總べての產業共通の惱みである以上農機具配給株式會社の活動を信賴しなければならない。東北地方に農機具が少いことは既に見た所であるけれども此の少い農機具すら動力源の不足の爲に利用されない樣な事があつてはならない。地力維持との關聯に於て動力源として大家畜を活用することは東北地方の現有資源の活用に依つて東北地方農業を近代化することゝなるわけである。

東北地方に畑作を加味し有畜機械化することになつても此の地方が冷害と云ふ自然的災害を受けること多く、而も此の地方の農業が後進的であるが故に此の地方の農家を常に科學的に指導する必要がある。現實の研究機關と農家との遊離は兩方面かち云はれてゐる事であつて此の兩者がより緊密なる連絡を保つことが肝要にして、殊に新しい農業生產構造を採用するには其の中堅人材の養成が叫ばれ眞の意味での農民道場が各地に建設せられて實際の農業指導を

なすと共に、此處に養成された人物が鄉土の技術的にも精神的にも推進力となつて現時の農業への國家要請に應へなければならない。農民精神作興の必要が叫ばれてから久しい。けれどもそれには實際の農業に接觸した指導者がなければ自發的な農民精神の振起は望まれない事と思はれる。

津輕リンゴ經濟史の展開

櫻・庭一男

序

いつの時代も、いづこの處も、さうなのだが、明治の十五年からの不況、十七年の恐慌に襲はれた若い日本が、ことに、新しい翼をそろへて、ふたたび生きるための今しも飛びあがる姿態をとつてゐた。

その時そこで、若い日本の哲學が蒼空を仰いで歎息しそしてそこから勇を鼓して雄々しくも、羽博かうとしてゐたのだ。

だが、とにかくに見よ。あの西南戦役から明治十四年ころにわたるその比に、通貨膨脹によるインフレーションが現はれだしそれがふたたび十四年を契機として不況の淵に沈降した。そのわけの主たるもの、これ實に、時の政府の緊縮政策であつたといふてよい。そして十四年からこのかた政府紙幣も銀行紙幣の流通高も共に漸減して反對に正貨準備は增加したのだつた。

この通貨減少の現象は物價の下落となり、金利の低落をまねいだ。この景氣の沈降は十四年下期に到り既に萠芽を現はし十五、六年において進行し、十七年には恐慌狀態を呈した。これを商工業にみると、インフレ時代に簇生した數多い小さき經營が十六、七年に到つては俄かに破產するもの續出するの悲劇に遭ふたのである。

これを、また、農家にみる。當時の米價は、明治十六年から低落の一途を、たどつてゐたから農家の人々も左程惠れなかつた。この悲境のなかから、新しい若い翼もてる「不死鳥」が羽博きしようとしてゐたのだ。

リンゴの自家生産經濟の前進

みちのくの弘前の地に、明治十六年八月、農具會社が創立せられ農具の販賣をなし、木造町の貸金を業とする兩會社、十九年設立をみたる青森のおなじく貸金を業とせる共益會社など一應、あたらしい息吹のなかから生れいでた。十二年の一月に創立した第五十九銀行もその雰圍氣のうちに育てられて行つた。

そして政治思潮が津輕の大地に二つの流れをもつてゐた。すなはち一は義塾派ともいふべき本多庸一氏、菊池九郎氏を領袖とし他は官僚派とも目された大道寺繁禎氏、小田桐勝英氏の派閥である。前者は進歩派であるといはれ後者は保守派であるといはれた。

津輕の土地を哺み育てた岩木の靈峰も仰ぎ見る人の眼によつてはちがつてゆく。保守思想はそれで眞として訴へる進歩思想はそれでまた眞として訴へる。だが、最後の審判はたゞ大自然のみが與へる。

津輕では、こうして、とぼしい作物のなかに、リンゴが微かに生態をつゞけてゐた。そして、リンゴの生産地域がややに、擴大されてゐた。宅地栽培から野畑栽培への性格が變貌されだしてゐたのである。

その經營も自家勞力をもつてなされた單獨性の形態のほかに集團性の企業形態も出て明治十八年藤崎に組合員十一名からなる敬業社や、山形の邑落に興農株式會社とて設立されるなど栽培法研究、斯業擴張を指標にリンゴの生産經濟が新しく展開する。

これらの經濟行動は企業を續繼して利潤會計をつくるにある。それは唯單に經營といはれない。野澤の村の申合組合も中弘組合も散策的生産態度を一擲して實利的、繼續的に企劃し、やゝ經營規模が大きかつただけに、巷間にはたゞ嘲笑や冷笑のみがこれに應酬して、其苦心を冒險に、理解も同情も與へさへしなかつたのだ。

こゝろみに、明治二十年前後の青森縣がもつ作物景觀をうかがふ。

東津輕郡—米、粟、味噌、海扇、鱈、鰯、煎海鼠、石決明、雲丹、昆布、酒、白酒、檜材、石材、飴

西津輕郡—米、麥、大豆、鰯、鯡、鮒、蛇、蜆、檜材、泥炭

中津輕郡—米、大豆、葱、里芋、牛蒡、銅、鉛、炭、生絲、藍、漆、蠟燭、賣塗、塗器、竹細工

南津輕郡—米、蔬菜、果實、酒、味噌、湯波、金、銀、砥石、炭、生絲、挽細工、蔓細工

北津輕郡—米、大豆、麥、松茸、椎茸、鯉、鯡、乾鮑、酒、泥炭、麻、檜材

上北郡—牛馬を以て第一として其他大豆、小豆、蕎麥、蕨粉、鰯、鱈、鮫、鮭、鱒、鰻、北寄貝、鷄卵

下北郡—檜材、杉材、馬、牛、鮫、干鮑、海參、昆布、惠胡草、海苔、鰯、蛤蜊、若布、硫黄、百合

三戸郡—米、大豆、麥、蕎麥、鱒、鰯、鱈、鰈、北寄貝、乾鮑、煙草

この狀態で、その景域と農産物、水産物、鑛産物の關係からしても、リンゴはまだ太陽の前の蠟燭にすぎなかつた。津輕の自然のなかでリンゴ經濟が、かすかに、育つてゐただけであつたのだ。

その比、「歐化」といふことは「アメリカ臭い」といはれた。リンゴは地林檎と區別されて「西洋リンゴ」とか「アメリカリンゴ」とかいはれたのにはそんな譯も考へてみねばならなかつた。

その「西洋リンゴ」の感性は一種の「派手」であり、そのたゞさはる仕事は「進歩的」とも見られた、しかも、的

もないリンゴの事業ともなれば、經營規模が大きくなると「好き」や「醉興」の沙汰ではなく、純然たる會計の土に立たねばならない。そこに「進歩的なもの」を一概に否定する人々の嘲笑が湧くのであつた。

又、事實、進歩派と目せられる人々のうちにも、頗る危險率を包藏してゐる人も尠くなくはない。華やかな物が凡て短命に終る。インテリゲンツイアによくある弱さだ。進歩派でも、保守派でも、津輕武士團の果樹愛好の姿なのだが、次第に、愛好以上に眞劍な人々の手にも、この頃から移つて來た。それは、野畑栽培となりやがて山地栽培にまでゆくのに並行して逞しい生命の推進力をみせて來てゐる。

土とともに生きリンゴと共に死ぬ人の姿である。こゝでも死ぬことは生きることであつた。

リンゴ配經經濟の基礎的思想

もしも、思想史的津輕リンゴ史といふものがあるものとしようか、明治の初葉期より二つの潮流があつたといふてよい。一つは日本主義の思潮である。又一つは基督教主義の思潮である。これを津輕リンゴ生産經濟にのみ限つてみると、日本主義の思潮は、勸業寮から配布を亨けた栽培家又はその流を汲んだ人々の基本思想である。これは富國的精神が基調し國本主義を根底としてゐる。經濟的躍進をリンゴの使用價値にみようとする農本主義である。基督教主義の思潮はジョン・イング師やフォリ神父の基督教宣教師や教へこまれた人々の持つてゐる思想で、神の恩寵と攝理とを經緯とした精神で、何れかといへば、世界主義的傾向である、リンゴの交換價値をも早く發見したのであつた。判然の區劃とはいへぬまでも、かゝる潮流のあつたことは否定出來ない。

今我カ青森縣ノ地タルヤ沃野遠ク連リ土壤膏肥ニシテ五穀壤々加フルヨ山河ノ利亦タ乏キニ非サレハ興起スヘキノ

事業又タ鮮トセス而シテ著シキ成功ヲ奏セシモノアルヲ聞カサルハ實ニ地方ノ爲メニ嘆慨ニ堪ヘサルナリ

と、産業雜誌第一號に所收されてゐるが、昨今年に至り頻りに植付るもの多きに至りたり畢竟リンゴは種々の舶來品中尤も當地方より適するは形狀光澤ありてしかも亦た美なるを以て知るべしと稱揚され出し一本のリンゴ樹から結顆千個を收め十錢に六個とすれば十六圓六十錢の收益を見るに至つて地方最適の事業とされ、次第にその安定性が認められていつた。その交換價値十六圓六十錢とは、明治二十一年の弘前のリンゴ樹に依るのであるが、同じい弘前のさる商家の「從明治二十年十月米買入口立帳」に據れば二十年十月は一俵一圓五十錢也となつてゐる。これを中央の一石建でゆくと四圓九十九錢也といふ時代で、物價指數などを中心に景氣變動過程をみることとすれば

	銀貨一圓に對する紙幣價格	物價指數	米價	金利	公債價格
明治十四年	一・六九六	二〇七	一一・二〇	一・三九	六九・五〇
十五年	一・五七一	一九七	八・九三	・八五	七三・三八
十六年	一・二六四	一六四	六・二六	・六五	八三・九五
十七年	一・〇八九	一四四	五・一〇	一・〇三	九三・三九
十八年	一・〇五〇	一五二	六・五三	一・〇七	九六・三三
十九年	一・〇〇〇	一三八	五・六〇	・七五	一〇七・三五

物價指數は明治六年基準
米價は深川正米相場一石建値平均
金利は一萬圓以上貸付年利平均利子の平均
公債は金祿公債東京株式取引所相場

で貨幣價値下落の傾向を辿つてゐるときである。

近客生產期のリンゴの品種

明治十四年、中津輕郡藤代村の人が所有してゐた宅地三反歩の中には、千成、九十九號、印度、玉カン、オートレー、御福、梨肌、松井、君ケ袖があつた。

同じい年、北郡沿川村五林平の人の宅地には松井、高瀬、梨肌、岡本、大福、オートレー、外があつた。

明治十五年、南部野澤村の人の邸宅地約六反歩の中に松井、オウトレー、岡本、梨肌、金時、アレキサンダー、卸福、榲桲形、駄卵、外五十種もあつた。

漸くにして結びたる果實は、見るも豐大、色澤は美麗にして「在來果實擧げて之れに及ぶものなきのみならず其味頗る上品にして需要が多く」なつていつた。唯、早中晩の鑑別は出來なかつた。

明治十七年にはオートレー、岡本、芹川がよいと謂はれた。一般にこの比、名稱を知るには全く困つた。津輕產業會のうち果樹會は、一町歩以上所有の者を以つて結成したのであつたが、その會員、楠美冬次郎氏、佐藤喜一郎氏、薄田貞一氏、和田傳治氏、菊池栢衞氏、中畑清八郎氏、菊池三郎氏、黑瀧忠造氏、佐藤英司氏、佐野樂翁氏には相倚つて會費一ヶ年三圓出費して、毎年二名づゝ他府縣を巡回して、リンゴ情況を視察したりした。

この頃、浪岡方面では、目賀澤の蝦名文八郎氏

黑石方面では、淺瀨石の北山長二郎氏

北山　彦作氏

境　宥　治氏

板柳方面では、板柳の松山久兵衛氏
新和の野宮　源太氏
高杉方面では、獨狐の鳴海仁太郎氏
清水方面では、樹木の齋藤　東助氏

らが、よく標本園などと稱せられて、視察の人々の脚がしげかつた。

明治十八年には、オートレー、岡本の君ケ袖、松井の緋ノ衣が寵兒であつた。

明治十九年には、芹川の小猩々なども好かれた。

それで、弘前は到る所リンゴに適應なるより、前年來、各所に種植し、大なるは周圍一尺に至りたるものもあつた程で、有志家は爾今リンゴを以つて一大産物となす爲め、空隙の地並びに不用の地へは皆同樹を種々接木することに一決して頃日よりはこの準備に着手するやうな有樣になつた。

また、弘前に隣接の清水村も「從來殖産の我國家に利益を及ぼし他の比にあらざるに着眼し、就中苹果の如き尤も能く土地に適當し、能く豐産し、能く成熟し、能く貯藏に堪へるに至りては、又他に比すべきものにあらざれば、わが里をして悉くリンゴ園となさんには、其收益、果して幾何ぞやと無心熱意を以つて事業の盛大を圖る」やうになつた。

明治二十三年には中郡清水村の小澤の人の農業場には

一號園に雪ノ下
二號園に千成、大中、大トレー、レーネット、柳玉、六號

三號園に柳玉

四號園に玉カニ、松井、緋之衣、金時、ナベヤ、雪ノ下、紅魁　外

あつたのである。

かうして、自足的栽培が換貨的栽培にまで、止揚されだし自家生產より近客生產の度が、一層加つて、リンゴの消費價値のほかに、交換價値が認識の對象とされ、營利精神が寵兒である社會では、殘るくまなく數字に分解されて、資本主義的會計にまで築き上げられて行くのであつた。

そこにこそリンゴの自然的屬性の一層の探究、商品價値の適合性の究明が約束されてゐなければならなかつた。

それは、鐵道の敷設により盛岡までの「陸蒸汽」を利用してはるばる東京外の市場に送り出されたなど、明治二十三年で、その探究とは相呼應し、リンゴの商品化のため、相關係を結ぶのであつた。

説　苑

東北地方に於ける畜産と有畜農業

農林省畜産試驗場長　釘本昌二

東北地方といへば、我々は直ちに土地が廣く、耕地のみならず山林原野の多い所、冬期は積雪多く、寒氣凜烈であるが、夏期は比較的冷涼な所を想像する。これは縣により、或は山地帶と海岸地帶等により相當の差異が存するにしても、東北地方の土地及び氣候に對する一般概念としては正しいといつても差支無いと思はれる。今假に林野面積について考へてみても、農林省統計表によれば、東北地方の林野面積は北海道を除いた內地總林野面積の約二割六分を占め、他地方に比し著しく大である。

この土地が廣く、林野に富み、夏季が冷涼であるといふことは農業上、畜産發達の必然性、基礎條件を具備するものといふべきであらう。さればこそ東北地方の產馬は古來有名で、史上に名を殘すやうな幾多の名馬を出し、頭數に於ても我が國馬產の中心をなしてゐる。馬以外の家畜に於ても、例へば緬羊に山羊に或は家兎に相當見るべきものがあるが、馬に較べれば未だしの感無きを得ない。牛の如きは、東北以外の府縣に於ては全農家戶數中、約三一・二%の農家がこれを飼養してゐるにも拘らず、東北地方に於ては牛飼養農家の總農家に對する割合は約一四・五%で、他府縣平均の半ばにも達してゐない。

斯く東北地方は畜産の勃興すべき好條件に惠まれながら、馬産以外に於ては從來特に顯著な發達を示してゐない。この原因は大部分は、我が國特有の封建時代からの社會的事情に歸せねばならぬが、近代に於ては資金、民度等の關係もあつたらうし、又家畜を飼つたとしても交通不便のため、その生産物の販賣に困難を感じた等の理由も擧げねばなるまい。

然し現下の事情は一變して來た。凡ゆる家畜及び畜産物は多々益々辨じ、最早生産過剩に苦しむやうなことは考へられなくなつた。今日に於ける畜産は軍需上、健民强兵を作る基礎たる國民榮養上、將又農業經營上、缺くことのできない重要産業となつてきた。家畜及び畜産物の增産も今日に於ては廣義農業の果たすべき重大使命である。家畜の飼養は單なる個々の農家の經濟上の都合からではなく、國土全體からみた農業の使命、或は大東亞の指導者たる大和民族の原泉地としての皇國農村の構想によつて決せらるべきであるといつても過言ではあるまい。斯る觀點よりすれば、我が國に於ては全國的に家畜の增殖を圖らねばならぬのであるが、畜産適地たる東北、北海道は特に畜産資源地帶としての重要な役割を果さねばならぬ。

勿論、顧つて眼を東北農民自體の生活の上に轉じてみても、畜産は極めて重要な意義を有するものであることを忘れてはならない。約半ケ年間を積雪下に過さねばならぬ東北農民は、その陰鬱な日々を家畜を伴侶とすることによつて幾らかでも明朗にすることができよう。又酷寒に耐へて活動するには毛、毛皮等の防寒用資材が必要である。それにも增して寒國人はその健康を保持し、活躍するため、多量の動物性蛋白質及び脂肪を乳肉卵等によつて攝取することが必要である。このことは、かの寒帶の住民たるエスキモー人が殆ど肉類のみを常食としてゐる事實に徵しても明らかであらう。寒ければ寒い程、畜産物は生活上或は生理上絶對に必要となつて來る。今後東北農民は一層家畜家禽

を飼養して生活を明朗化し、畜産物を自給して生活を豊かにすると共に、凡ゆる艱苦を克服し、戰時下農民の重大使命を餘す所なく果して行けるやうな健康な身體を作ることをも考へねばなるまい。

然らば東北地方に於ては如何なる家畜が最も適してゐるだらうか。又國土全體からみて如何なる家畜を增殖して行くべきであらうか。これに對しては凡ゆる家畜家禽の飼養に適し、從つて總べてのものを今後一層增殖せねばならぬといふことができる。例へば豚も海岸地帶、都市附近等に於ては大いに飼養すべく、又鷄も一〇羽乃至は二〇羽養鷄の形態に於て益々全般的に普及せしむべきであるが、特に重點を置くとすれば、東北地方の自然的環境を十分利用し得る家畜、即ち草食家畜の增殖に最も力を入れることが必要であらう。

先づ馬産はその歴史よりみても、又現狀よりみても、東北畜産の大宗たるべきは異論の無い所で、今後戰爭遂行及び東北の農業經營に支障を來たさぬやう大いに發達せしめねばならぬ。

役肉用牛は最近頓に增加の趨勢に在るが、その經濟性より考へ、東北地方に於ても益々增殖せしめねばなるまい。東北農業關係者は從來動もすれば、役肉用牛の飼養は馬産の領域を侵害し、これを增せばそれだけ馬が減ずるが如く考へてゐるのではないかと思はれる節もあるが、これは全く杞憂に過ぎぬといはねばならぬ。馬産地帶と役肉用牛地帶とは自ら環境的にも異なつてゐるだらうし、又從來、馬を飼ひ得なかつた小農家が牛を飼ふのであれば何等馬が減る理由になるとは考へられぬ。更に又、馬産地帶に役肉用牛を入れたとしても、それは決して馬を減ずる原因とはならず、却つて馬産の安定性を確保する結果となるであらう。今日、馬の飼養者は軍の必要に應じて何時でも愛馬を御召しに應ぜしめ得るやう準備し、且突然の徵發を受けようとも、農業經營に支障を來たさぬだけの方策を講じて置かねばならぬのであるが、內實は急に馬がゐなくなり困るといふやうな場合も少くないであらう。然しこの場合に、粗

飼料には事缺かぬ東北地方のことであるから、産馬地帯にも馬ほど飼養費が嵩まず管理に手數を要しない役肉用牛を平素から幾らかでも入れて置けば、農家は何時でも安んじて愛馬を國家に捧げることができるであらう。かくてこそ村に在つては農耕を助け、時至らば軍馬として奮闘すべき馬本來の使命を完うせしめることができるのであり、馬に心あれば、役肉用牛が後に控えてゐるから銃後の心配は要らぬと、安心して勇躍應召することであらう。東北地方に於ける馬と役肉用牛は互に相剋するものではなく、寧ろ家族的關係にあらしむべきものであり、役肉用牛の増殖は益々馬産に安定性を附加し、農業經營を愈々堅實ならしめる結果となるであらう。

次に緬羊も東北地方に好適した重要な家畜の一つである。今日既に東北は我が國に於ける緬羊事業の中心地帯となつてはゐるが、實數に於ては未だ播種期の域を脱せず、寧ろ今後の發展が期待されてゐる。即ち今後、飼養頭數の全般的増加によつて羊毛の増産を圖ると共に、將來は滿蒙支に對する優良種羊の供給地となることも考へて置かねばなるまい。山羊も動物性蛋白質及び脂肪の得難い山地帯に於ては榮養分自給の意味に於て大いに増殖せねばなるまい。家兎も更に更に増殖し、軍需用兎毛皮の供出に遺憾なきを期せねばならぬ。

以上の諸家畜に劣らず、今後東北地方の重要家畜として増殖して行くべきものに乳用牛がある。今日、牛乳及び乳製品は國内の必要量をも遙かに滿たし得ぬ現狀であるが、更に北方大陸の大和民族發展のため、或は又南方諸地域の治安工作上、煉粉乳の輸出が喫緊の問題とされ、その飛躍的増産が切望されてゐる。而も乳牛の飼養は比較的多種多樣の條件を必要とし、場所を撰ばずこれを増殖することは困難であるが、幸ひ東北地方は土地に於て、氣候に於て、或は飼料に於て頗る惠まれてゐるのであるから、今後は製乳工場の設置と相俟つて集團的に飼養頭數を増し、北海道と共に我が國に於ける主要酪農地帯として大いに發達して行くべきであらう。從來、酪農業が北海道に發展し、東北

地方に芽生えすることの遲かつたのは、自然的條件でも經濟的條件でもなく、寧ろ馬産に專念するといふ遺風と共に偏へに人の問題であり、農民の智能の問題であつたといへよう。酪農業が發達すれば作物栽培上の必要から馬産が亦堅實な發達を遂げることは北海道の實例を見ても明らかである。

以上の如く考へて來ると、東北地方に於ては凡ゆる家畜を增殖すべきであり、又その餘地も少くないのであるが、然らば東北の畜産は如何なる形態に於て發達せしむべきであらうか。土地が廣く、而も家畜の放牧に適する林野も多いのであるから、一應、專業畜産乃至は牧場經營の可能性も考へられぬことはない。事實、東北地方には現在、官民の牧場が相當存在するのであるが、然し一方、東北の林野中には御料、官公有のものゝ面積が比較的多いのであるから、將來、續々と牧場が開かれる餘地は少いと見ねばなるまい。從つて東北地方の畜産も結局、その大部分は穀菽農業經營乃至は養蠶經營の一要素として個々の農家が適當な家畜を飼養して行く所謂有畜農業形態に於て發達して行かねばならぬ。而その有畜化は寧ろ、高度に行はれることが適當であらう。

翻つて東北地方に於ける農業經營狀況を概觀するに、諸種の點よりして東北農業は家畜なくしては眞にその生産力を發揮し得ない宿命を負つてゐるといつてもよい。かの昭和初頭に於ける農業恐慌克服上、畜産が如何に重要な役割を果たしたかを想起すれば、東北農業に於ける畜産の不可缺性卽ち有畜農業の重要性は自ら明らかであらう。嘗ては有畜農業は農家經濟の更生といふ寧ろ個人經濟的見地より唱導され、且その目的を達してきたのであるが、今日に於ては戰時下に於ける食糧の增産自給といふ農業の最大使命を達成するため、益々その普及發達を圖らねばならなくなつてゐるのである。かゝる意味から既に周知のことではあるが、東北農業は絕對に有畜農業でなければならぬ所以を改めて檢討してみよう。

今日の農村は戰線に工場に多數の青壯年者を送り、勞力の不足が漸く顯著となりつゝあるが、東北地方に於ける農家一戸當りの耕地面積は約一町四反（田八反六畝、畑五反三畝）で、他府縣平均の約九反（田五反二畝、畑三反八畝）に比すれば相當大であり、而も氣候の關係上、所謂農繁期が短縮されるだけに東北地方は他府縣に比し一層勞力の不足を痛感してゐることであらう。而も今日は從來よりも少い人手で從來以上の耕作能率を擧げねばならぬ戰時下である。それは樂なことではないが、然し畜力の利用を一層徹底强化し、一人々々の働きを大きくして行けば不可能なことではない。今後は畜力を耕起、碎土、代掻、畦立、中耕、除草には勿論、石油も不足してゐる際とて脱穀、調製、製繩等にも極力利用して行くことが必要である。馬産地方に於ては農家の平常の生活にももつと〳〵馬を利用すべきであると思ふ。

尙東北農業に畜力が絶對に必要であるといふ理由として、耕作に速度を要するといふことも擧げねばなるまい。即ち半歲近くを積雪に覆はれ、作物の生育する期間の短い東北に於ては融雪と共になるべく速く播種を終へねばならぬし、又收穫も寒冷の至る直前に短時日を以て了することが肝要である。畜力なくしては以前より少い人手で、播種と收穫に適期を失せぬやう、やつて行くことは殆ど不可能である。況や東北地方と雖も出來るだけの多毛作が要求せられる時代に於てをやである。即ち此處にも東北農業に於ける役畜の不可缺性が認められるのである。

一戸當りの耕地面積が廣く、耕作に速度を要するといふことのため、東北地方に於ける役畜としては特に馬が重要視されてをり、又事實必要なのである。然し東北地方と雖も、耕作面積の少い農家は相當多く、耕作面積の一町歩に滿たない小農が全農家戸數の約五三％を占め、更に二町歩未滿の中小農家を考へると全體の約八三％に達し、これ等のうちには馬の飼へぬものも少くないであらうが、かゝる農家に於ては牛によつても十分その目的を達することがで

きる。兎に角、東北の農家は經營の規模樣式に應じ、牛か馬か或は牛と馬との双方を飼つてその力を利用し、今後の勞力不足にも屈することなく、大いに耕作の能率を擧げ、積極的に農業の進展を圖つて行かねばならぬ。

次に今日の農村に於て、勞力の不足以上に增產を阻むものとして肥料の不足が呼ばれてゐる。而も販賣肥料の不足は當分緩和される見込が無い。この肥料情勢下に於ては極力肥料の自給を圖ることが必要であり、又自給肥料としては厩肥が最も有效であることは萬人の認める所である。殊に耕地の廣い東北農業に於ては配給の肥料のみでは十分の收穫を擧げることは先づ困難であり、從つて施用する厩肥の多寡が作物の收量を左右するといつてもよい。故に各々の農業經營に適した家畜を最大限度まで飽養し、家畜の食ふものは有機質肥料でも、草でも、農作物の副產物でも、何でも必ず一度家畜の腹を通し、その厩肥を合理的に腐熟させて、なるべく多量に作物に施すやう心掛けねばならぬ。

厩肥の重要性は現下に於ける販賣肥料の不足補充といふ意味のみからではなく、特に東北地方に於ては災害豫防といふ重大な意味をも有してゐる。厩肥を多量に施用すれば土壤の理學的性質が改善されて、その保溫力が增す結果、冷害を蒙ることが少い。このことは過去屢次の冷害に際し經驗された所で、茲に改めて贅言する必要もあるまい。兎に角、厩肥は東北農業の基調をなすものであり、この面からも東北農業は有畜農業でなければならぬといふことができよう。

更に東北農業の特殊性として前にも觸れた通り、耕作の可能なのは春から秋にかけての約半歲で、後の半年は積雪下に過さねばならぬため、勞ひ冬期間は遊んではゐないにしても、農業に勞力を活用することが困難である。然し今日は多だからといつて遊んでゐることは許されない。この無駄を無くするためには何でも家畜を飼ふことが必要で、

家畜を飼へば冬期の半ケ年も有效に利用でき、翌春必要な貴重な厩肥は準備できるし、又直接、間接に戰爭に必要な畜産物が得られ、國家の必要に副ふことができるのみならず、農家個々の經濟も改善されるし、更に又、動もすれば怠惰に陷り勝ちな寒國の冬の農村の惡弊も少からず是正されよう。

以上に於て東北農業に於ける畜産の不可缺性を再吟味したのであるが、然らば今日の家畜增殖上の一大難關たる飼料の問題は東北地方に於てはどうなつてゐるだらうか。勿論、東北地方と雖もこの問題は些かも樂觀を許さない現狀に在るといつてよからう。然し他府縣に比べれば解決の可能性が大きいといふことはできようし、又どうしても解決せねばならぬ。

例へば東北地方は林野面積が大であるため、山野草は豐富に得られる。又大豆、小豆等の莢穀類の栽培が盛であるため、その副產物たる莖葉、莢殼等は良質の粗飼料として多量に利用し得る。作付面積の多い稗の藁も飼料としては稻藁より良好である。山に行けばアカシヤその他の濃厚飼料に匹敵する樹葉類が豐富に得られる。立派な濃厚飼料である樹實類も相當採集できる。從來、普通に用ひられてゐる萩の葉も藁に劣らぬ良好な飼料である。斯く考へて來ると、東北地方には他府縣では得られぬやうな特殊飼料がまだ〳〵殘つてゐるであらう。

更に山野草は養分の多い若い時期に刈取つて利用すれば著しく濃厚飼料を節約することができる。又これ等の山野草も飼料價値の少いものは草生地より驅逐し、優良草種のみを繁茂せしめるか或は牧草によつて草生の改善を圖れば僅かな濃厚飼料で十分家畜を飼養することができる。

又天惠のみに頼らずとも、耕地面積の廣い東北農業に於ては飼料作物栽培の可能性が大である。否、寧ろ東北に於ては主要作物の作付に支障なき限り、大いに飼料作物を栽培すべきである。必ずしも個人々々でなくとも、部落全體

を見渡してその農業經營に必要な丈けの家畜を飼ふために、若干の飼料畑を設けることにより、濃厚飼料も相當程度自給できよう。これを基とし、凡ゆる天惠の飼料を利用して家畜を飼へば、厩肥も出來、畜力も生じ、從つて主要食用作物の增産を齎すことゝなる。

又特に飼料畑とまではいへぬが、休閑地に飼料作物を栽培することも可能である。東北地方では氣候の關係上、大部分の田畑は冬期間利用されてゐないが、この裏作に耐寒性の强い飼料作物、例へば青刈ライ麥、ヘアリーベッチ等を栽培すれば、表作に支障なく、從來の田畑から餘分に優良な飼料を生産することができる。かゝる方法で飼料作物を作れば、畜力の利用と相俟つて著しく耕地の利用度を高め、土地の生産力を增す結果となるのである。斯く東北の飼料問題は今後相當の家畜が增さうとも、工夫と努力によつては毫も悲觀する必要はないのである。

以上を要するに、地形、氣候等の自然的環境より考へ、東北地方は我が國屈指の畜産適地であり、又一方、東北農業は家畜なくしては眞にその生産力を發揮し得ぬ實情に在り、而も家畜飼料の問題は今後の遣り方、工夫、努力によつては必ずや解決できるのであるから東北の農業諸君は些かも躊躇することなく、農業經營に相當の家畜を取入れ、農といはず、畜といはず、農畜渾然一體の高度有畜農業形態に於て、戰時下農民の重大使命完遂に邁進せられんことを熱望しつゝ本稿を終る次第である。（完）

岩手に於ける刈分小作慣行と時局下其の變遷の概況

岩手縣小作官　長谷川良二

農林省農事試驗場長寺尾博士は、東北產業研究第二號『食糧增產問題と東北地方』に於て、東北地方の如き冷害を受けやすい地方に就ては、所謂食糧增產の實體、是が成り立つ現實の場面は、結局其の年の天候の程度に對しての減收防止といふことに歸着することを强調せられると共に、次の如き重要な事實を指摘し一般の注意を喚起せられて居る。

即ち「昭和九年の冷害凶作の場合に於て、或地方に於ては一帶に半作とか三分作とか云ふ樣な不作狀態が、其の地帶一面に現はれてゐる中に、點々として、勿論極めて稀ではあるが反當四石程の優良なる玄米の收穫を擧げた例がある。そして特に注目すべき重大な事柄は斯樣に極端な天候不良に拘らず、事實に於て反當四石の生產に必要な光と熱が所謂凶作地の上に天から降つて來てゐたと云ふことである。

而して一般農家が、耕作に當り太陽からの熱と光とを作物に吸收させるだけの用意を缺いてゐたに反し、今擧げた特殊の精農家達は冷害の氣象狀態の下に於てさへも、反當四石の生產に必要な熱と光を稻に吸收させる用意が出來てゐたものと解せられる。そして問題は「天の惠としての豐富な熱と光をどの程度迄人間が有效に利用し得るか否かと云ふことに存すと考へられる」と述べられ、災害地稻作につき再檢討の必要を提唱された。

岩手縣も舊來冷害凶作の被害地であつて、特に被害の著しい縣北並河岸沿ひの地方には刈分小作が廣範に殘存し、

五年に一回、三年に一回と頻發する冷害凶作に對しては、之を天災と諦觀して居るかに見受けられるのであるが、寺尾博士の說かれるところを、體得すると共に舊來の消極的態度を捨て時局下食糧增產に奮ひ起たなければならぬと思はれる。

かゝる見地から、岩手縣に於ける刈分小作慣行を檢討し、最近に於ける改善のあとを辿つて見度い。

後にも觸れる所ではあるが行論の都合上茲に刈分小作なるものについて一應觸れて置かう。小作料額決定の方法を大別すれば二つある。其の一つは地主と小作人が小作契約締結に際してあらかじめ小作料額を決定し、年々其の決定額を納入する所謂定額小作制である。他の方法は地主と小作人が立會の上で刈取をなし、其の總額を小作契約の際決定した一定率を以て地主と小作とに分配する方法であつて所謂定率小作制なのである。刈分小作なるものは後者の事であつて、我國現在の小作制は大部分前者であるけれども殊に岩手、青森を中心に東北地方に刈分小作制度が殘存するのである。此の刈分小作の發生原因は各地方によりまちまちであつて其の根本原因については容易に知り難いのであるけれども、慣行調査によつて重なる原因を揭げると次の如くである。

一、氣候、地勢等自然的事情の惠まれざることによるもの――旱冷、旱魃、洪水等の災害を受けること頻繁なる地方では定額小作料を納むることが困難であり、小作料減免の紛爭が絕えず之を避けんが爲に刈分小作としたのである。

二、小作人の知識幼稚なる爲――農民の農業經營に關する知識が幼稚で技術に熟達せず年々の收穫不定の爲刈分小作を希望するのである。

三、小作人の小作料滯納によるもの――定額小作料を定められたる小作人が屢々小作料を滯納せる爲地主は小作料